

テニスクラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

多肥宮尻遺跡

2018年6月

高松市教育委員会
株式会社 GGP

例　言

- 1 本書は、多肥上町テニスクラブ建設工事に伴う埋蔵文化財報告書であり、多肥宮尻遺跡の報告を収録した。
- 2 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。
調査地：高松市多肥上町
発掘調査：平成29年4月24日～5月17日（実働15日）
整理作業：平成29年6月1日～平成30年6月29日
調査面積：594m²
- 3 発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、それらの費用は株式会社GGPが負担した。
- 4 発掘調査及び整理作業は地方自治法第180条による補助執行により、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 香川将慶、高上拓、梶原慎司、渡邊誠及び同課非常勤嘱託職員 益崎卓己、中西克也、上原ふみ、大迫敏美、三輪望が担当した。報告書の整理・原稿執筆は香川、益崎が担当した。
- 5 本書の編集は香川、益崎が担当し、非常勤嘱託職員 森原奈々がこれを補佐した。
- 6 本調査に関連して、以下の業務を委託発注により実施した。
遺物写真撮影 西大寺フォト
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。
- 8 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）、方位は座標北を表す。
- 9 出土遺物の実測図は、土器1/4、石器1/2、遺構の縮尺は図面ごとに示している。
- 10 各遺構番号は、1面で10〇〇、2面で20〇〇と表示する。
- 11 今回の報告で土器の編年や併行関係を求めた資料は以下のものでそれぞれの形式名を引用している。
香川県教育委員会 1991『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ-下川津遺跡-』
信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『第16回古代学協会四国支部研究会 弥生時代前期・中期初頭の動態』古代学協会四国支部
信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年・凹線文期を中心にして」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター
片桐孝浩 2006『小山・南谷遺跡Ⅱ』香川県教育委員会

多肥宮尻遺跡

本文目次

例言

第1章 調査の経緯と経過 1

 第1節 調査の経緯 1

 第2節 調査の経過 1

第2章 地理的・歴史的環境 2

 第1節 地理的環境 2

 第2節 歴史的環境 2

第3章 調査の成果 5

 第1節 試掘調査の成果 5

 第2節 調査の概要と基本土層 5

 第3節 第1調査区の遺構・遺物 6

 第4節 第2調査区の遺構・遺物 19

 第5節 第3調査区の遺構・遺物 31

 第6節 第4調査区の遺構・遺物 34

 第7節 第5調査区の遺構・遺物 42

第4章 まとめ 46

 第1節 遺構の変遷 46

 第2節 SK1012の土器焼成遺構の可能性について 46

 第3節 多肥宮尻遺跡周辺の流路跡について 47

 第4節 まとめ 49

観察表

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 周辺発掘調査地位置図.....	3
第2図 遺構配置図(1面目).....	7
第3図 遺構配置図(2面目).....	9
第4図 第1調査区 1・2面目平面図・土層図.....	11
第5図 第1調査区 SH平断面図・出土遺物···	13
第6図 第1調査区 SK平断面図・出土遺物···	15
第7図 第1調査区 SP平断面図.....	17
第8図 第1調査区 SD・SK平断面図.....	18
第9図 第1調査区 SK・SP平断面図.....	19
第10図 第2調査区 1・2面目平面図・土層図.....	21
第11図 第2調査区 SR 1001 平断面図・出土遺物	23
第12図 第2調査区 SR 1002 平断面図.....	25
第13図 第2調査区 SR 1002 出土遺物①···	26
第14図 第2調査区 SR 1002 出土遺物②···	27
第15図 第2調査区 SR 1002 出土遺物③···	28
第16図 第2調査区 SK平断面図・出土遺物	30
第17図 第2調査区 SP平断面図・出土遺物・遺構検出治時出土遺物	31
第18図 第3調査区 遺構配置図(1・2・3面目)	32
第19図 第3調査区 SP平断面図・出土遺物・遺構検出治時出土遺物	33
第20図 第4・5調査区 1面目平面図	35
第21図 第5調査区 断面図	37
第22図 第4調査区 SR 1002 平断面図.....	38
第23図 第4調査区 SR 1002 出土遺物.....	39
第24図 第4調査区 SP・SD平断面図	41
第25図 第5調査区 SR 1002 出土遺物.....	43
第26図 第5調査区 SK平断面図・出土遺物	44
第27図 第5調査区 包含層出土遺物	45
第28図 第5調査区 遺構検出治時出土遺物	45
第29図 表採遺物	45
第30図 周辺遺跡流路位置図	48

挿 表 目 次

第1表 遺物観察表①.....	51
第2表 遺物観察表②.....	52
第3表 遺物観察表③.....	53
第4表 遺物観察表④.....	54
第5表 遺物観察表⑤.....	55
第6表 遺物観察表⑥.....	56

写 真 図 版 目 次

写真図版 1

- 1 第1調査区1面目（東から）
- 2 S K 1002 断面（南から）
- 3 S K 1002 全景（南から）
- 4 S K 1008 断面（南から）
- 5 S K 1009 断面（南から）
- 6 S K 1012 遺物出土状況（北から）
- 7 S K 1012 断面（北から）
- 8 S K 1012 完掘（北から）

写真図版 2

- 1 S P 1001 断面（北から）
- 2 S P 1003 断面（南から）
- 3 S P 1003 完掘（南から）
- 4 S H 1001 全景（南から）
- 5 第1調査区2面目全景（西から）
- 6 S D 2001 断面（南から）
- 7 S D 2001 完掘（西から）
- 8 S K 2001 完掘（北から）

写真図版 3

- 1 第1調査区A-A'断面（北から）
- 2 第2調査区1面目（西から）
- 3 S R 1001 完掘（南から）
- 4 S R 第2調査区1002断面（北から）
- 5 S R 第2調査区1002完掘（南東から）
- 6 S K 1014 断面（南から）
- 7 S K 1016 断面（北から）
- 8 S K 1016 遺物出土状況

写真図版 4

- 1 S K 2003 完掘（北東から）
- 2 第2調査区C-C'断面（西から）
- 3 第3調査区1面目（西から）
- 4 第3調査区包含層1断面（南から）
- 5 S P 1017 完掘（南から）
- 6 第3調査区3面目全景（西から）
- 7 第4調査区1面目全景（北から）
- 8 第4調査区土層（西から）

写真図版 5

- 1 S R 第4調査区1002完掘（南東から）
- 2 S K 1017 遺物出土状況
- 3 S K 1017 完掘（北から）
- 4 第5調査区包含層1完掘（北から）
- 5 第5調査区基本土層（東から）

写真図版 6

- 1 S K 1012 出土遺物
- 2 S R 1002 弥生土器甕①
- 3 S R 1002 第6層出土遺物
- 4 S R 1002 弥生土器
- 5 S R 1002 第4層出土遺物
- 6 S R 1002 石器・須恵器
- 7 S R 1002 弥生土器甕②
- 8 S K 1001 出土遺物

写真図版 7

- 1 S K 1016 弥生土器 甕
- 2 出土遺物一括
- 3 撃成破裂を受けた土器片

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

事業者からテニスクラブ建設工事に伴い事業地における埋蔵文化財の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、多肥宮尻遺跡や空港跡地遺跡に隣接し、その集落域が広がっている可能性が考えられた。事業者と協議を行った結果、任意の協力による事前の試掘調査を実施することで合意した。平成28年1月7、8日に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を確認した。高松市教育委員会は結果を1月14日付けで香川県教育委員会と事業者に報告し、同日付けで香川県教育委員会から事業地全体を周知の埋蔵文化財「多肥宮尻遺跡」に追加登録する旨の通知があった。

これを受け、1月22日に事業者から造成に関する工事について文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が提出され、高松市教育委員会から香川県教育委員会へ進達したところ、1月27日付けで「工事立会」の行政指導があり、実施した。また平成29年1月27日に事業者から建設工事に関する工事について再度文化財保護法93条第1項に基づく発掘届出が提出され、香川県教育委員会に進達したところ、2月10日付けで「工事立会」の行政指導があり、実施した。その後、4月21日付けで建物基礎部分の開発について設計変更等があり、新たに文化財保護法93条第1項に基づく発掘届出が提出され、進達を行った結果、遺跡の保護が図れないことから発掘調査の行政指導がなされた。

これを受け、高松市教育委員会は事業者と協議を行い、工事着手前に発掘調査を実施することで合意し、4月21日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「多肥上町テニスクラブ建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし、高松市教育委員会は発掘調査・整理作業を行い、その費用負担及び契約・支払事務は事業者が行うこととした。

第2節 調査の経過

発掘調査は平成29年4月24日から5月17日の日程で実施した。調査範囲は建物基礎のうち東側を除く範囲と防火水槽部分を対象に実施した。調査面積は594m²である。調査の経過は以下のとおりである。

4月24日～5月9日 各調査区の1面目の重機掘削。人力による遺構確認・掘削作業。

1面目の遺構の平・断面図作成及び写真撮影

4月28日～5月13日 1面目調査終了した調査区から2面目重機掘削。

4月24日～5月15日 2面目の遺構の平・断面図作成及び写真撮影。

5月17日 調査完了。

整理作業は平成29年7月1日より実施し、遺物の洗浄や実測、写真撮影、図面整理、トレース等を行い、平成30年6月末には整理作業を終了し、発掘調査報告書を刊行した。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

多肥宮尻遺跡が位置する高松平野は讃岐平野の一部であり瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に位置し、概ね高松市の平野部を指す。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東部に屋島や立石山塊、南西中央部に石清尾山や淨願寺山、西部に五色台、六ツ目山、白峰、堂山の山系が連なる。いずれの山地も讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で20～300mの低い山地である。また、北方の瀬戸内海には男木島や女木島等の島々も市域に含み、対岸は岡山県岡山市や玉野市、瀬戸内市が対峙する。

高松平野は讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、中でも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存する春日川以西は香東川による沖積平野ともいわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線的に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前は現在の高松市香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を北東流するもう一本の主流路が存在した。この旧河川は現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没しているが、空中写真等より、林地区から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、旧香東川の流路は現在の御坊川として今でもその名残をとどめている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流路口で穏やかな傾斜を持つ扇状地系の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壤をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くからため池を構築して水不足を解消してきた。そのため、山間の洪積台地洪積層の分かれ目に多くのため池が分布する。また、今回の調査地である多肥地区周辺では、ため池に加え出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。調査区周辺でも栗木出水や平井出水、鈴木出水等が見られる。

第2節 歴史的環境

高松平野では、高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等の大規模な開発事業に伴う発掘調査が行われ、それ以後も開発工事に伴う発掘調査は増加し、多くの遺跡が確認された。多肥上町周辺でも、都市計画道路の新設（多肥平塚遺跡等）や高等学校建設工事（多肥松林遺跡等）等の開発工事が行われ、埋蔵文化財の包蔵状況のデータが蓄積されている。

本節では高松平野における遺構の変遷を多肥上町周辺で確認された遺跡を中心に遺跡の変遷と様相について概観したい。

旧石器時代～縄文時代 高松平野における旧石器時代の遺跡はほとんど確認されていないのが

現状である。久米池南遺跡、雨山南遺跡等が知られるが、表採や混入によるとみられる。中間西坪井遺跡ではAT火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。

縄文時代に關しても明確に確認された遺跡は大池遺跡で草創期と考えられる有舌尖頭器2点が表採で報告されているが、この遺跡以降、晩期に至るまでの遺跡は確認されていない。晩期では林・坊城遺跡やさこ・長池遺跡等が確認されている。日暮・松林遺跡や川島本町遺跡等の調査例からみると平野部の微高地や讃岐山脈から延びた丘陵周辺に縄文時代晩期の集落が存在した可能性が高い。

弥生時代 繩文時代晚期から弥生時代前期にかけて鬼無藤井遺跡、林・坊城遺跡、さこ・長池遺跡、井手東遺跡、空港跡地遺跡、宮西・一角遺跡、松林遺跡、弘福寺領田団比定地等、高松平野の各所で人々の活動痕跡を確認できる。鬼無藤井遺跡を除けば、明確な住居に関わる遺構は少ないが、遺跡の広がりや水田の確認例などから、農耕の定着に加え、稻作の開始による生業の変化が見て取れる。そのため、平野部への集団の進出が促進され、集団の活動の痕跡が繩文晚期以降平野部で確認できるようになったと考えられる。その後、中期前葉に奥の坊遺跡やさこ・長池遺跡を除いては、中期中葉から後葉まで活動した痕跡は見受けられない。弥生時代中期中葉から後葉にかけては多肥松林遺跡や太田下・須川遺跡等で集落を確認できるが、周辺



第1図 周辺発掘調査地位図

でまとまった資料はこの時期に限られる。その後、中期後半から後期前半は、高松平野の東部で大空遺跡、久米山遺跡群等でまとまった資料が見られる。そして、後期後半から終末期にかけて、平野部の中央部に位置する上天神遺跡や天溝・宮西遺跡等で集落が再び営まれる状況が確認でき、外来形土器が、まとまって確認された。

このような集落の移動現象を通時的に把握すると、高松平野では弥生時代を通じて長期に継続する集落は少ないことが指摘できる。これは、自然環境及び社会環境等の変化によって集団の移動や再編成が幾度かに渡って起こった可能性が想定される。

古墳時代 古墳時代前期前半段階までは弥生時代終末期から継続する集落が展開する。集落の変遷は調査事例が少なくあまり明確ではない。古墳時代中期から後期の遺跡としては空港跡地遺跡や太田下・須川遺跡等で居住城が確認できる。また、古墳時代中期からは萩前・一本木遺跡で大規模な集落が築かれ、古墳時代の住居を囲繞する方形区画溝が検出された。

古代 古代における高松平野は山田郡と香川郡で構成されたが、現在の高松市域では古代の阿野郡の一部も含んでいる。萩前・一本木遺跡では飛鳥時代の基幹水路を確認した。白鳳期には屋嶋城が築かれ、坂田廃寺跡等の白鳳寺院が建立される。また、古墳時代後期から古代にかけて自然堤防として機能していた範囲が埋没し、平野全体の起伏が少くなり、条里地割のような計画的かつ整然として水田区画が導入可能となったと考えられる。平野のやや南側を東西方に向に横断する南海道が設置された後、高松平野の東部に位置する詰田川、春日川、新川隆起部の平野部から平野の西部にかけて、南北軸が東に約9～11度振れた条里地割が広く分布しており、条里地割が面的に施工された可能性が指摘されている。条里地割の一部は弘福寺領讃岐国山田郡田図に描かれた範囲に推定されている。奈良時代に入ると讃岐国分僧寺・尼寺が建立される。古代の遺構や遺物がまとまって確認される遺跡は、前田東・中村遺跡、新田本村遺跡等である。現状では平野部東部の山田郡側で古代の遺跡や遺物が確認されている。その中でも、宝寿寺跡といった寺院や官衙施設との関係が指摘されている前田東・中村遺跡、官衙的遺物が多く出土している新田本村遺跡が所在する付近は山田郡衙が存在した可能性や、これらの遺跡が屋嶋城との関連施設としての機能を有していた可能性が指摘されている。

中世以降 平安時代末（11世紀後半）高松平野で遺跡数が増加し、鎌倉時代（13世紀）に空港跡地遺跡、東山崎・水田遺跡、前田東・中村遺跡等で集落跡が確認されている。特に空港跡地遺跡では大規模な調査の結果、中世における地域社会の変遷や土地利用の状況などについて整理され、村落景観の一端が復元されつつある。

中世における高松平野の勢力として香西氏、十河氏、由佐氏等が知られ、これらの居館跡である佐料城、十河城、由佐城が知られている。

近世になると天正16年（1588年）に生駒親正によって高松城の築城が開始される。その後、生駒騒動が起り、生駒家は出羽国矢島（秋田県由利本荘市）に移され、水戸徳川家の長子であるの松平頼重が東讃を治めることになった。

第3章 調査の成果

第1節 試掘調査の成果

事業地は当初周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、隣接する「多肥宮尻遺跡」及び「空港跡地遺跡」の遺構が当地に分布する可能性があった。このため、事業者の任意の協力により3本のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。

調査成果の概要は、平成28年度に刊行した高松市教育委員会編『高松市内遺跡発掘調査概報－平成28年度国庫補助事業－』に掲載したが、要点は以下の4点にまとめられる。

①すべてのトレンチで、遺構・遺物が認められた。土坑・ピットなどの遺構は、事業地北西側に比較的密に分布する。また、事業地南側の2・3トレンチでは、自然流路と考えられる黒褐色系シルトの堆積が認められる。②遺構の検出された褐灰色シルト層は、中世の遺物を含む。また、黒褐色系シルトは褐灰色シルト層の直下に位置し、3トレンチでは層中より多量の弥生土器が出土した。③西側隣接地及び北側隣接地の調査では、一連の自然流路が検出されている。埋土の特徴や流走方向、出土遺物の時期が共通しており、今回検出した自然流路様の堆積と対応する可能性が考えられる。④遺構の連続性及び出土遺物の時期の共通性等から、多肥宮尻遺跡と関連する遺構群と推定できる。

以上の結果より、事業地の全域が、周知の埋蔵文化財包蔵地「多肥宮尻遺跡」の範囲に追加登録された。

第2節 調査の概要と基本土層

今回の発掘調査では5ヶ所の調査区を設定し、遺構の掘削や測量、写真撮影等を行った（第2・3図）。遺物の取り上げ方法は遺構単位で取り上げ、層位ごとに取り上げた遺物は層位ごとに抽出した。遺構番号は調査区に問わらず遺構ごとに番号を記している。

今回の調査では住居跡1棟、流路跡2条、溝跡2条、土坑21基、ピット40基、包含層2ヶ所を確認した。遺構面は2～3面で、1面目は弥生時代前期後半から弥生時代後期後半までの遺構が確認された（第2図）。1面目で確認した遺構は住居跡1棟、流路跡2条、溝跡1条、土坑18基、ピット33基、包含層2ヶ所である。2面目で確認した遺構は溝跡1条、土坑3基、ピット5基である。2面目の時期は不明だが、弥生時代前期後半より古い時期の遺構と考えられる（第3図）。また、第3調査区は3面目を確認しており、時期は不明だがピット2基を確認した。

1面目の遺構検出状況は北側に土坑やピットが集中し、西側や南側では流路跡が幅広く確認できた。また、第2調査区を中心とした東側では弥生時代前期後半から弥生時代中期初頭を中心とした土坑を複数確認している。調査区南東側では弥生時代の包含層を確認した。

基本土層は調査区によって堆積層や遺構面の高低差、遺構面を形成する土層が異なる（第4図-A・B、第10図-C、第18図、第21図）。全体的な層位は、第2調査区東側を中心

心にみると現地表面は花崗土により盛土され、その下面是耕作土や床土が見られる（第10図-C - C'）。その下層に1面目の褐色シルト層が確認でき、その下層から褐色、暗褐色土層が3層分確認できる。8層に褐色シルト層が確認でき2面目となる。また、8層を含め、9、10層は基盤層になると考えられる。他の調査区の土層は第4図-A - A'・B - B'で示すように土質や堆積層位は異なっていることがわかる。これは、遺構確認面を基準に高低差を考えるとかなり凹凸が見られることから、当時の地表面は凹凸の見られる地形だったことが推測され、そこに堆積する土層も調査区によって異なることが考えられる。そのため、遺構面を形成する土層は以下のようになる。1面目は第1調査区でにぶい黄褐色シルト、第2調査区で褐色細砂、第5調査区で黒色シルト質細砂層により形成できる。2面目は暗褐色疊混じり細砂や褐色シルト、褐灰色シルト質細砂となる。2面目は大よそ褐灰色～褐色シルト層となる。

第3節 第1調査区の遺構・遺物

第1調査区は対象地の北側に設置した調査区で東西4.1m×南北3mで設置した（第4図）。1面目で検出した遺構は住居跡1棟、土坑13基、ピット12基を確認した。弥生時代前期後半頃を中心とした遺構群と考えられる。遺構は調査区中央から東側にかけて確認したが西側では検出できなかった。2面目で確認した遺構は溝跡1条、土坑2基、ピット4基を確認した。遺構は調査区中央から西側にかけて検出した。時期は出土遺物がないため不明だが、弥生時代前期後半よりも古いと推定できる。

1) 1面目

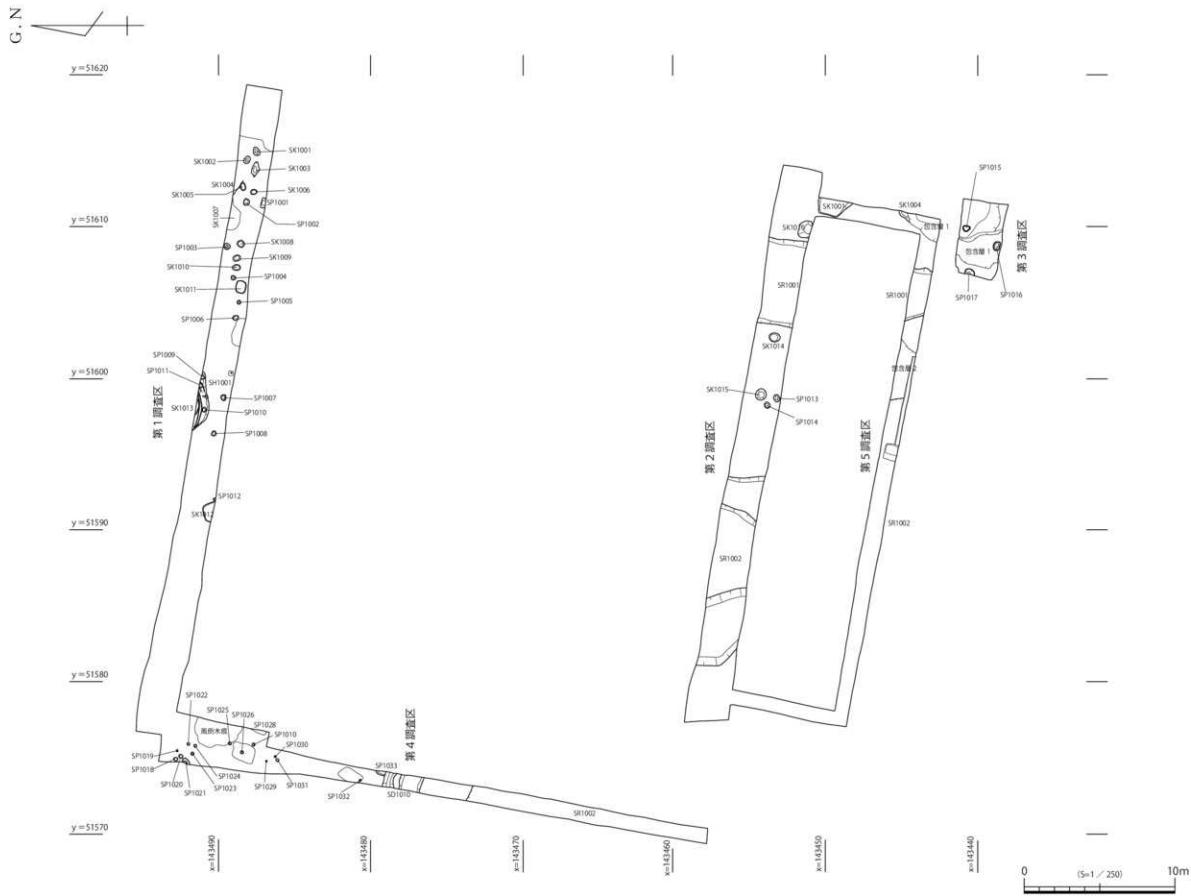
S H 1 0 0 1 (第5図)

調査区中央で確認し、北側は調査区外である。S P 1 0 1 0・1 0 1 1に切られている。確認した規模は東西約4.0m×南北約0.9m、深さ約1.5～2.0cmである。平面形状は隅丸方形か不整形な梢円形と推測できる。柱穴と考えられるS P 1 0 0 9は深さ約2.5cmで周溝と考えられる溝の外側で検出した。このことから、建物の柱穴は建物外にあったと推測できるが、規則的な配置ではなかったと考えられる。またS K 1 0 1 3は配置や断面の状況から住居に伴う貯蔵に関連した遺構と推測される。埋土は2層が灰黄褐色細砂質シルト層である。貯蔵穴や周溝、柱穴と考えられる3、4、7層はいずれもにぶい黄褐色細砂層で地山ブロックを含む。5層は貼床と考えられ、褐色細砂質シルト層でほぼ地山ブロックで形成できる。

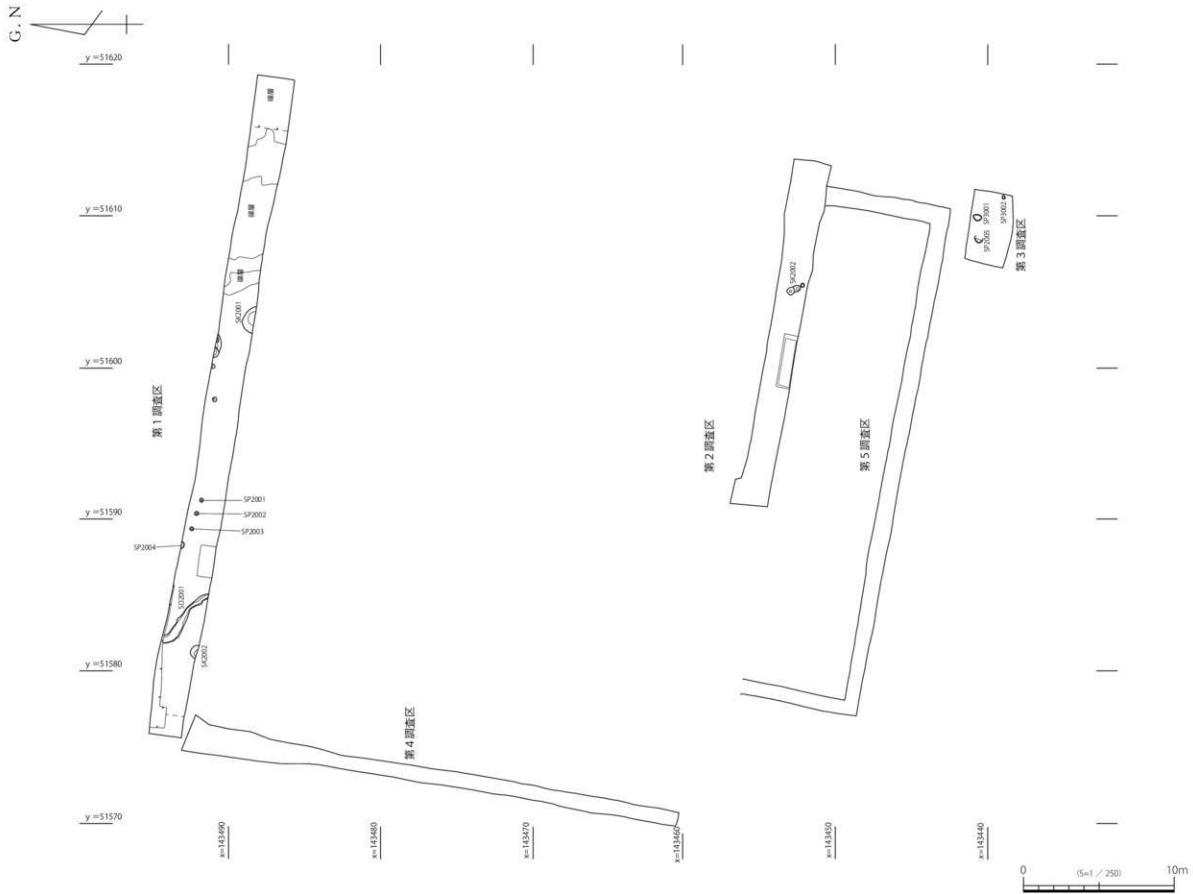
遺物は第5図-1 弥生土器の甕の口縁部が出土した。住居跡の詳しい時期は不明だが弥生時代に相当すると考えられる。

S K 1 0 0 1 (第6図)

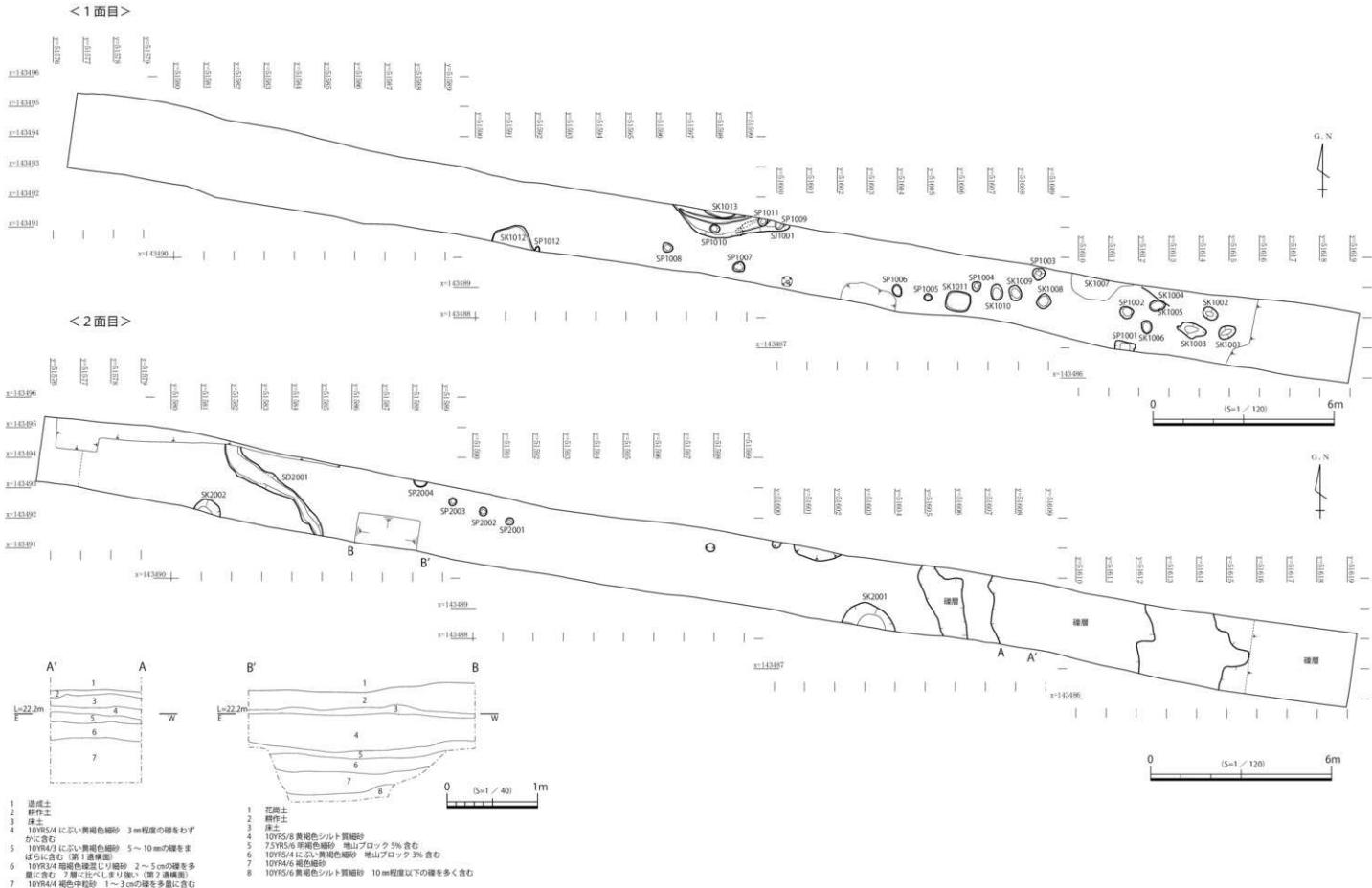
調査区東側で確認し、東西約0.6m×南北約0.4m、深さ約3.0cmである。断面形状はU字状で、褐色やにぶい黄褐色細砂質粗砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。



第2図 造構配図(1面目)



第3図 遺構配置図（2面目）



第4図 第1調査区 1・2面目平面図 ($S=1/120 \cdot 1/40$)

SK1002 (第6図)

調査区東側で確認し、東西約0.5m×南北約0.4m、深さ約15cmである。断面形状はU字状で、褐色細砂質粗砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

SK1003 (第6図)

調査区東側で確認し、東西約1.0m×南北約0.5m、深さ約20cmである。断面形状は不整形なレンズ状で、褐色粗砂質細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

SK1004 (第6図)

調査区東側で確認した。深掘りしたため形状は不明だが、SK1005を切り込んでいる。暗褐色細砂層が堆積している。図化していないが土師器片が出土している。

SK1005 (第6図)

調査区東側で確認し、東西約0.5m×南北約0.5mである。SK1004に切られている。暗褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

SK1006 (第6図)

調査区東側で確認し、東西約0.3m×南北約0.5m、深さ約20cmである。断面形状はU字状で褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

SK1007

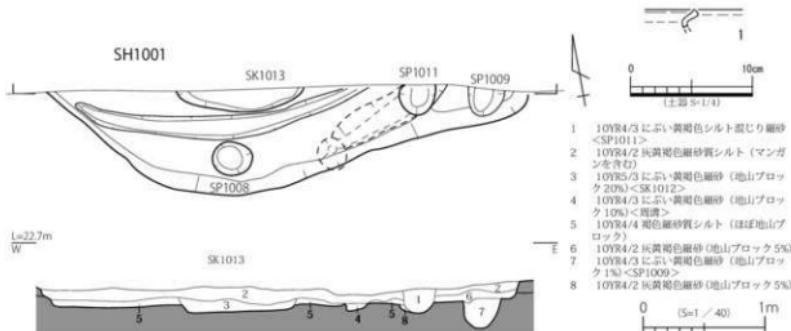
調査区東側で確認した。図化していないため詳細は不明である。

SK1008 (第6図)

調査区東側で確認し、東西約0.5m×南北約0.5m、深さ約20cmである。断面形状は不整形なU字状で、暗褐色細砂～シルト質細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器片が出土した。

SK1009 (第6図)

調査区東側で確認し、東西約0.4m×南北約0.5m、深さ約20cmである。断面形状はU



第5図 第1調査区 SH平面図・出土遺物

字状で、暗褐色細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器片が出土している。

S K 1 0 1 0 (第6図)

調査区東側で確認し、東西約0.4m×南北約0.5m、深さ約40cmである。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器片が出土している。

S K 1 0 1 1 (第6図)

調査区東側で確認し、東西約0.8m×南北約0.7m、深さ約20cmである。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器片が出土した。

S K 1 0 1 2 (第6図)

調査区中央で確認し、遺構の北半分を検出した。確認した規模は東西1.5m×南北約0.7m、深さ約30cmである。平面形状は隅丸方形と推測できる。断面形状は垂直に立ち上がり、箱型である。埋土に炭化物層や焼成による硬化面等を確認した。1層は灰黄褐色細砂層で黒色粒状のマンガンや土器を多量に含む。2層は褐色シルト質細砂層で土器を含む。3層はにぶい黄褐色細砂層をベースとした炭化物が多量に確認した層である。5層は暗褐色細砂層で焼成による硬化面で、地山ブロックや焼土ブロックを含む。また、焼土塊が出土した。出土した遺物から前期IIa頃埋没したと考えられる。この遺構の性格としては土器焼成遺構の可能性を考えられるが、詳細は第4章第2節で触れたい。

出土した遺物は第6図-2~9である。2~8は弥生土器で9は石器である。2は甕の体部から口縁部で、外面に3条の沈線が見られる。また、黒斑が見られる。3は壺の口縁部で時期は前期IIaと考えられる。4~7は甕の口縁部から体部の一部である。4は瀬戸内型甕考えられる。口縁部に刺突文を入れ、時期は前期Ic期と推定できる。5、6は沈線が2~3条見られる。5は前期IIaと考えられる。8は体部で突帯があり、摩滅しているが刺突文が見られる。9はサヌカイトの石鎌で未製品である。

S P 1 0 0 1 (第7図)

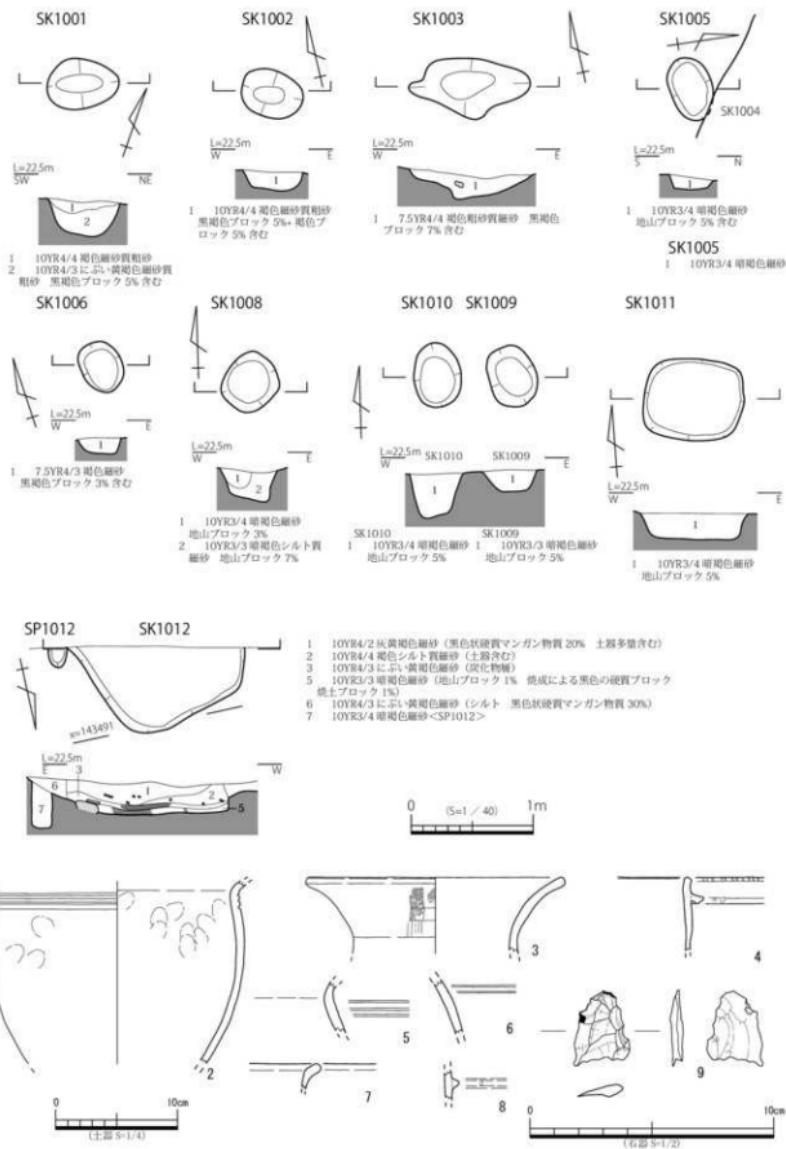
調査区東側で遺構の北側半分を確認した。確認した規模は東西約0.7m×南北約0.4m確認し、推定できる南北の大きさは0.8mと推測され、平面形状は正方形になると推測できる。深さは約25cmである。土層断面で柱痕を確認しており、形状が異なるが、S P 1 0 0 2と一連のものと推測できる。これらに伴うピットが東西にないことから南北方向の柵列と推測できる。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 0 2 (第7図)

調査区東側で確認し、直径約0.4m、深さ約30cmの円形である。断面形状はU字状である。柱痕は確認できなかったが、遺構の深さがS P 1 0 0 1と類似することから一連の遺構と推測できる。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 0 3 (第7図)

調査区東側で確認し、直径約0.4mの円形で、深さ約25cmである。断面形状はU字状で、



第6図 第1調査区 SK平面図・出土遺物

暗褐色細砂層が堆積している。柱痕を確認している。また、S P 1 0 0 4・1 0 0 5とは60cm～70cmの間隔で並んでいることから南西から北東に向かって続く柵列と推測できる。図化していないが弥生土器が出土している。

S P 1 0 0 4 (第7図)

調査区東側で確認し、直径約0.3mの円形で、深さ約28cmである。図化していないが弥生土器とサヌカイト片が出土した。

S P 1 0 0 5 (第7図)

調査区東側で確認し、直径約0.3mの円形で、深さ約20cmである。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 0 6 (第7図)

調査区東側で確認し、直径約0.4mの楕円形で、深さ約20cmである。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 0 7 (第7図)

調査区東側で確認し、直径約0.4mの楕円形で、深さ約15cmである。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 0 8 (第7図)

調査区東側で確認し、直径約0.4mの円形で、深さ約2cmである。暗褐色細砂層が堆積している。このビットとS P 1 0 1 0・1 0 1 1とは60cmの間隔で並んでいることから南西から北東に向かって続く柵列と推測できる。

S P 1 0 0 9 (第5図)

S H 1 0 0 1 内で確認し、南側半分を検出した。直径約0.4mの円形と推測でき、深さは約25cmである。S H 1 0 0 1 の柱穴と考えられ、第7層にあたる。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 1 0 (第7図)

調査区東側で確認し、直径約0.4mの円形で、深さは約32cmである。S H 1 0 0 1 を切っている。黒褐色細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器が出土している。

S P 1 0 1 1 (第5図)

調査区東側で確認し、遺構の南側半分を検出し、直径約0.4mの円形で、あると推測できる。深さ約20cmである。S H 1 0 0 1 を切っている。図化していないが弥生土器が出土した。

S P 1 0 1 2 (第6図)

調査区中央で確認し、遺構の北側半分を検出し、直径約0.4mの楕円形と推測できる。深さ38cmである。この遺構はS K 1 0 1 2 に切られている。遺物は出土しなかった。

2) 2 面目

S D 2 0 0 1 (第8図)

調査区西側で確認した。溝の軸は南東から北西方向に延びるものである。検出した長さは約4.

0m、幅約1.0m、深さ約10cmである。断面形状はレンズ状で、にぶい黄褐色シルト質細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S K 2 0 0 1 (第9図)

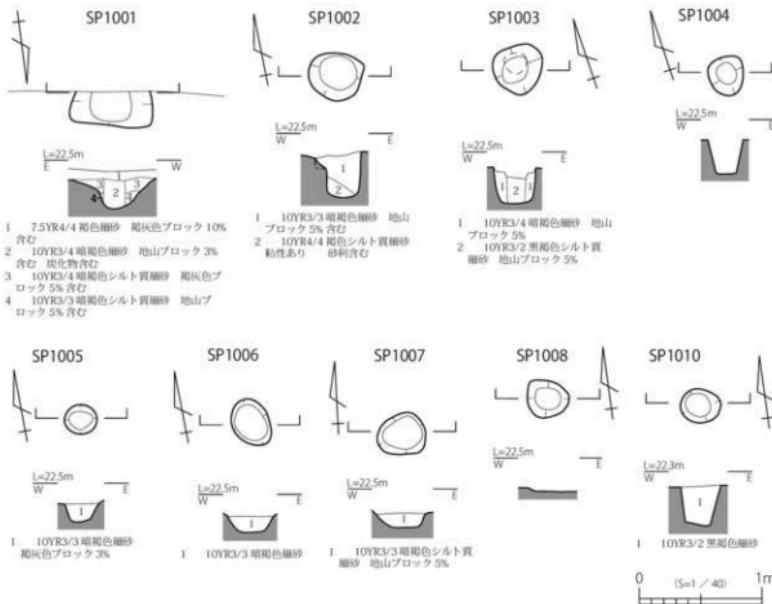
調査区東側で確認し、遺構の北側半分を検出した。直径は約1.3mと推定できる。深さは約1.0mである。断面形状は緩いU字状である。堆積層は1~9層に分かれ、にぶい黄褐色細砂や灰黃褐色シルト質細砂層等である。遺物は出土しなかった。

S K 2 0 0 2 (第8図)

調査区西側で確認し、遺構の北半分を検出し、直径約1.0mと推定できる。深さは約60cmである。断面形状はU字状で、8層にわたり細かく堆積している。

S P 2 0 0 1 (第9図)

調査区西側で確認し、直径約0.3m、深さ約25cmである。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。S P 2 0 0 1 ~ 2 0 0 4 と間隔がほぼ等しいことから柵列になる可能



第7図 第1調査区 S P 平断面図

性がある。遺物は出土しなかった。

S P 2 0 0 2 (第9図)

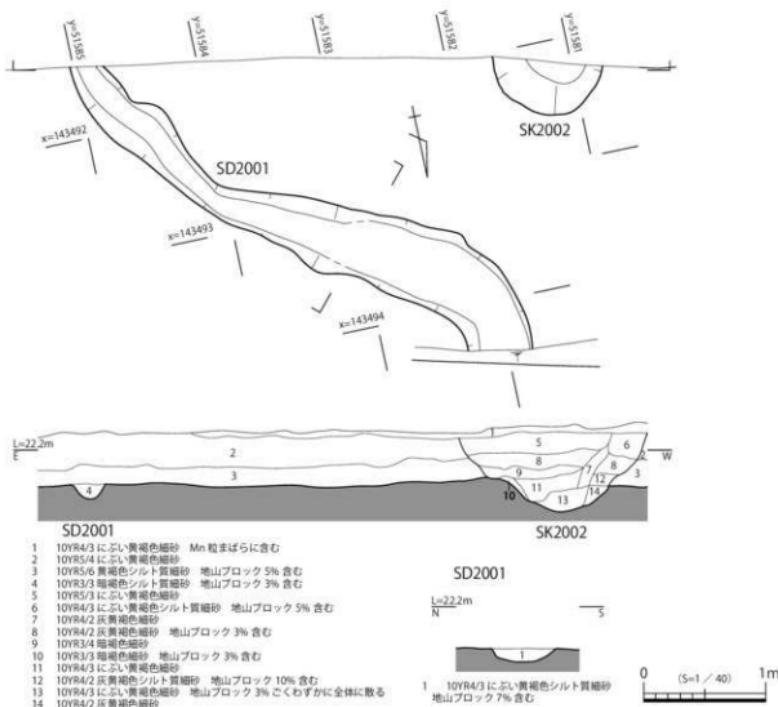
調査区西側で確認し、直径約0.3m、深さ約30cmである。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 2 0 0 3 (第9図)

調査区西側で確認し、直径約0.3m、深さ約10cmである。断面形状はレンズ状で、黒褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 2 0 0 4 (第9図)

調査区西側で確認し、遺構の南半分を検出し、直径約40cmになると推定できる。深さは約40cmである。断面形状はU字状で、灰黄褐色シルト質細砂層等が堆積している。遺物は出土



第8図 第1調査区 S D・S K 平断面図

しなかった。

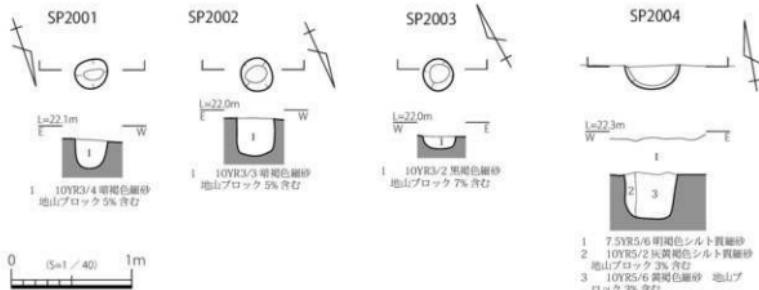
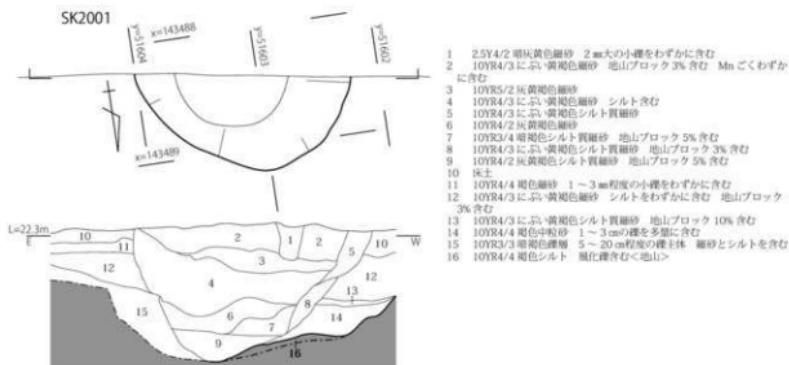
第4節 第2調査区の遺構・遺物

第2調査区は対象地の南側に設置し、第5調査区と接する。調査区は東西約3.7m×南北約2.5mである（第10図）。1面で確認した遺構は流路跡2条、土坑3基、ピット2基である。遺構は調査区中央から西側ではS R 1 0 0 2が広がり、その他の遺構は調査区中央から東側で検出した。2面で確認した遺構は土坑1基で、調査区東側で確認した。

1) 1面

SR 1 0 0 1 (第11図)

調査区東側で確認し、南北に延びる流路跡である。確認した幅は約6mである。深さは30cmで浅めである。埋土は4層確認され、中粒砂等比較的大きな粒子であることや礫を多く含む



第9図 第1調査区 SK・SP 平断面図

ことから水の流れを伴っていたと考えられる。2層からは比較的多量の土器が出土し、また、最下層の4層からも遺物が出土している。この流路跡は南側の第5調査区でも確認されているが、北側の第1調査区では確認されていないことから、この区間で北東方向に軸が変わると考えられる。当該地東側で空港跡地遺跡の調査を実施した際、流路跡を検出したことから同一の可能性がある。南側で確認された部分の幅は大差ないが、埋土が浅くなっていることが明らかになっている。埋没した時期は中世の土師質土器が含まれるが、弥生時代の遺物が多く出土しており、時期を特定できるものから弥生時代前期後半から前期末にかけて埋没したと考えられる。

出土した遺物は第11図-10～18である。主に弥生土器が出土し、18は土師質土器である。

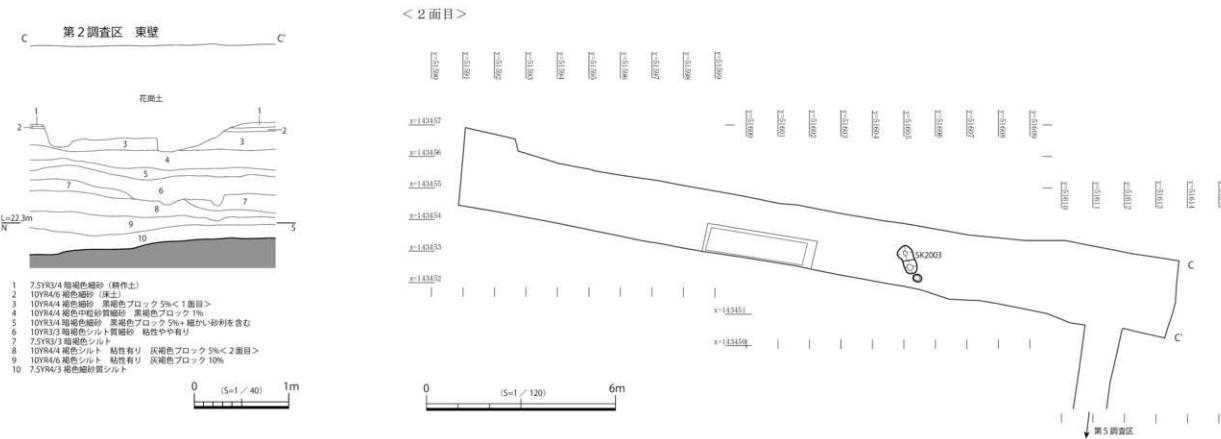
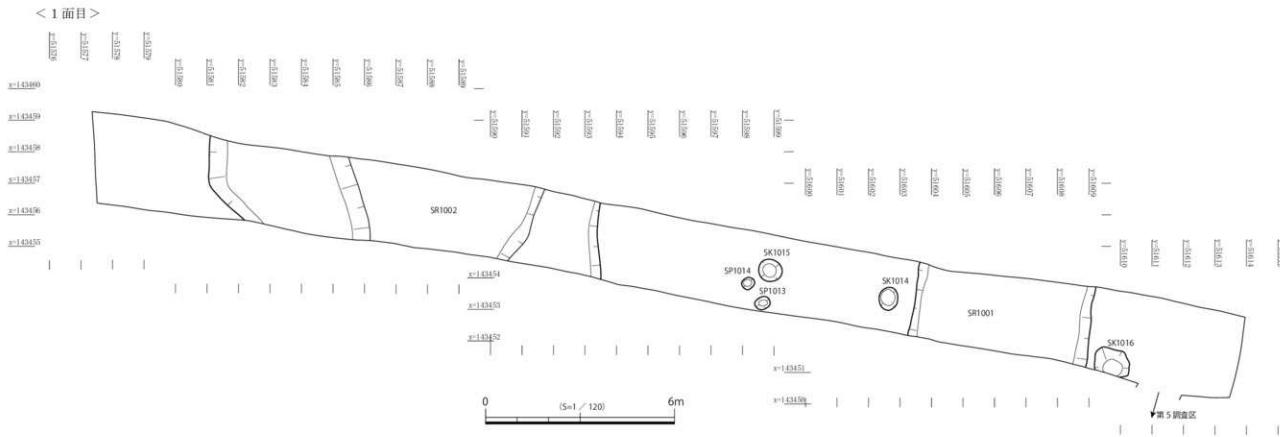
10～18は第4層から出土したものである。10～13は甕の底部である。14は甕の体部で外面はタテハケによる調整である。15は甕の口縁部で口縁部上面に1条の沈線を有する。16は甕と考えられる口縁部で内面に粘土を貼りつけている。17は壺の口縁部で、時期は前期IIc期と推定できる。

18は土師質土器で足釜の脚部である。

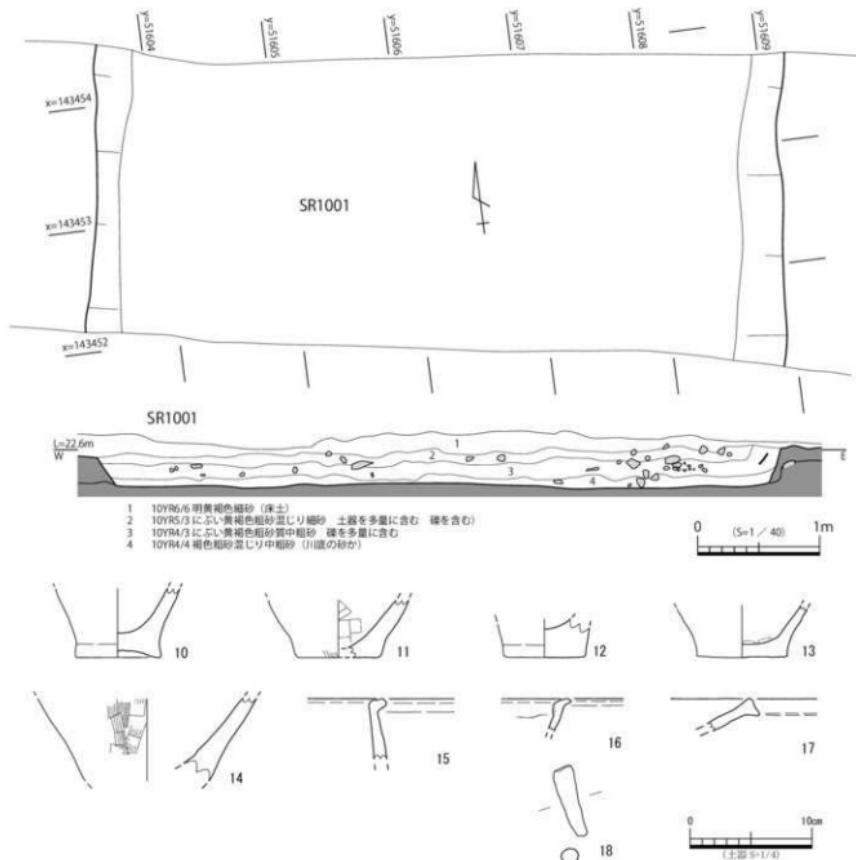
SR1002（第12図）

調査区中央から西側にかけて確認した北西流する流路跡である。確認した幅は約1.3.6mで、深さ約1.2mである。流路跡の西側は調査区外となるため確認できなかった。断面形状は流路の中心がゆるいU字状で外側に広がる。埋土は12層に分かれ、2時期にわたる埋没過程を確認した。土層は3層の褐色シルト～極細砂が最終埋没と考えられ、4層黒褐色シルト～粘土層が堆積し、弥生時代前期後半、後期後半頃、5～7世紀頃の土器片が大量に出土した。前述した2時期にわたる埋没過程の2時期目と考えられる。その下層である5層にぶい黄褐色粘土層では円礫を少量含む。6層は黒色粘土層で円礫を含み土器を含む。6層が1時期目の堆積層と考えられる。この層や下層の9～11層からは弥生時代前期後半から前期末頃、弥生時代後期後半から末頃の弥生土器が出土した。流路の最下層である11層はにぶい黄褐色粗砂～疊層で川底と考えられる。堆積順序は前述した通り、最初に5～11層が堆積している後、3、4層が堆積していると考えられる。堆積している時期は1時期目の堆積層から弥生時代後期後半から後期末頃の土器が出土することから、この時期以降に堆積していると考えられる。一方、2時期目に堆積している層からは7世紀初頭頃の須恵器が出土することから古代に流路が最終埋没したと考えられる。

出土遺物は第13図-19～第15図-102で、弥生土器、須恵器、石器である。弥生土器は甕、壺、高杯、器台、製塩土器が出土し、弥生時代前期後半から中期初頭にかけてと弥生時代後期前葉から後期後葉のものである。須恵器は杯身、蓋、甕が出土し、6世紀初頭から7世紀初頭にかけてのものである。石器は石鏃、スクレイパー、石錐等が出土した。



第10図 第2調査区 1・2面目平面図・土層図 (S = 1 / 120・1 / 40)



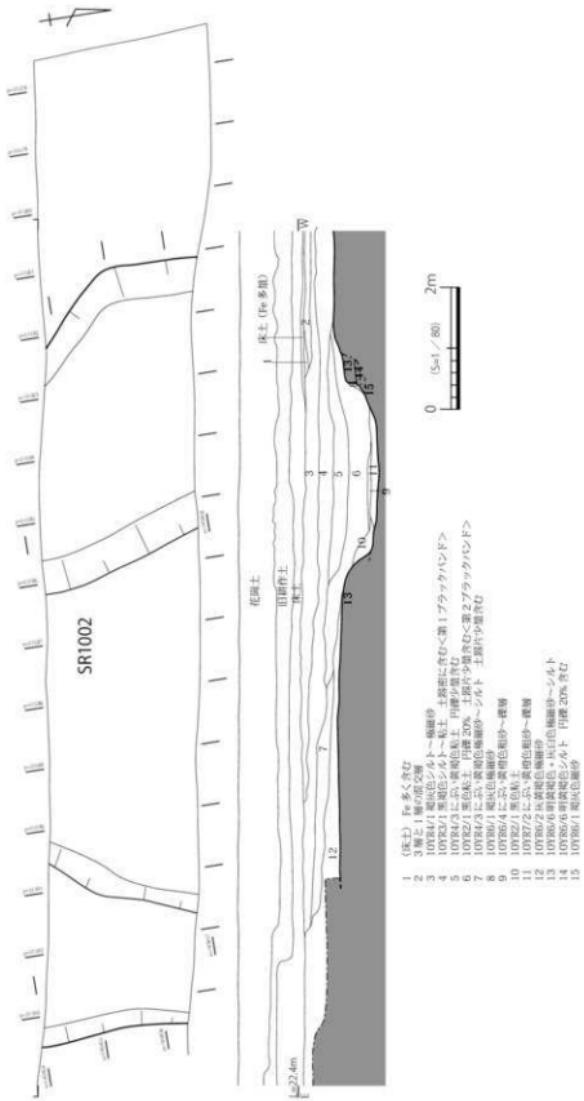
第11図 第2調査区 SR 1001 平断面図・出土遺物

19～27は第6層から出土した弥生土器である。19～22は甕の底部である。20は底部内面に粘土を上乗せして貼りつけた痕跡が見られる。22は内面に種子等が貼りついた痕跡が見られるが、特定できていない。23は甕の体部でタテハケの調整をしている。24は蓋で4つの孔が穿たれ、その内2つが欠損している。残存している孔の径は4mmである。25は甕の体部でヘラケズリ調整をしている。26、27は胎土に角閃石を含むことから香東川下流域産土器と考えられる。

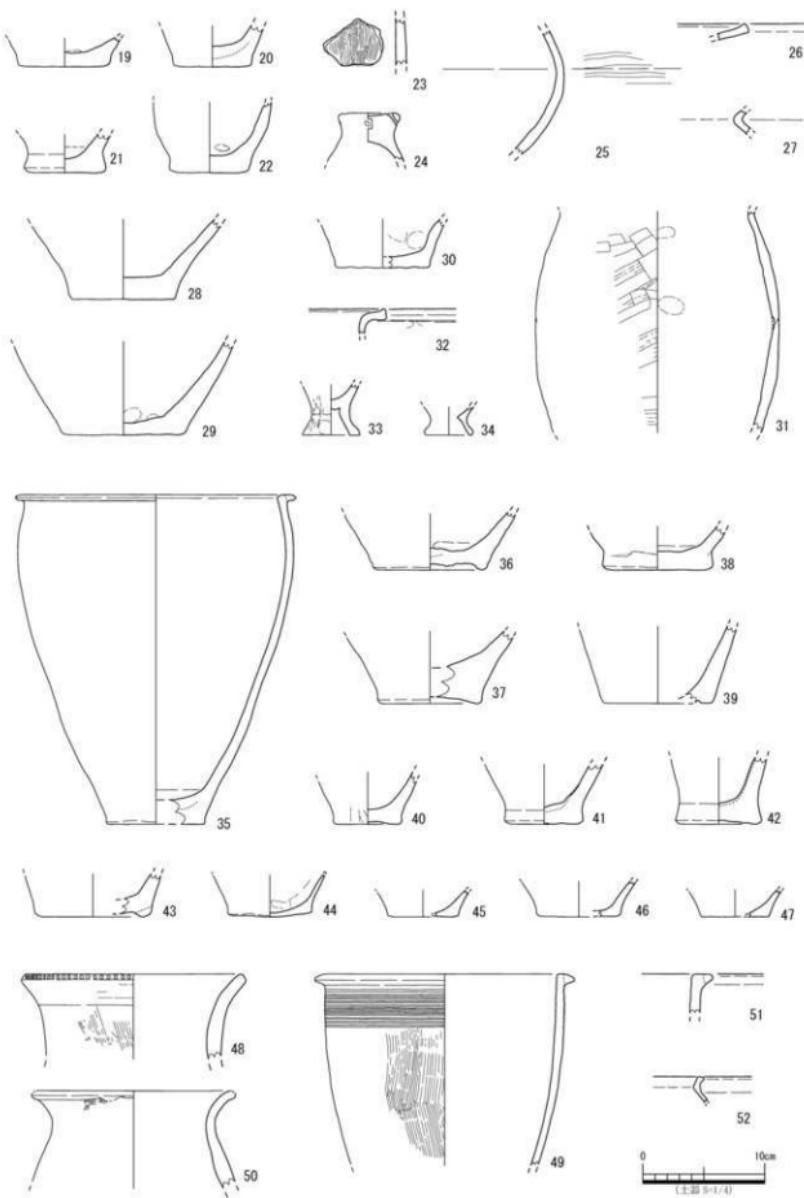
28～34は第4層から出土した弥生土器である。28～30は甕の底部である。28は破損面が明瞭で擬似口縁のような破損をしていることから粘土組積み上げ技法とわかる。31は

外面に横ハケで、内面はナデ及び指押さえである。3 2は壺の口縁部で、胎土に角閃石や金雲母が含まれる。時期は南谷 I ~ II 頃と考えられる。3 3、3 4は製塙土器の脚部である。3 3は外面をケズリ調整しており、時期は南谷 I ~ II 頃と考えられる。3 4は胎土に角閃石を含んでいる。

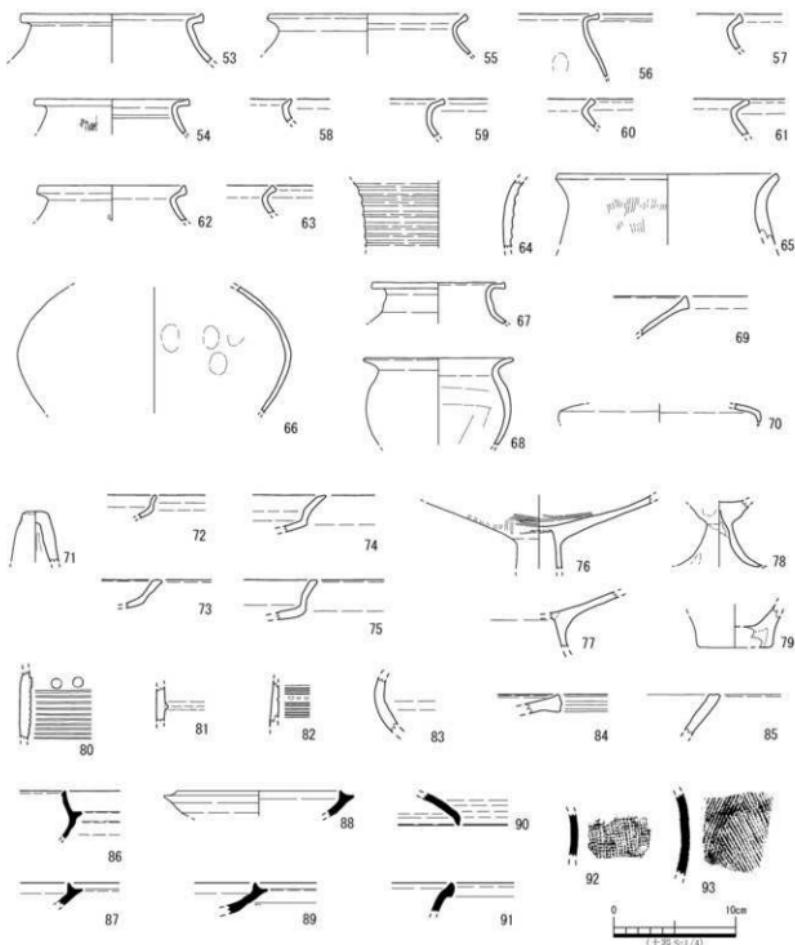
3 5 ~ 8 5までは S R 1 0 0 2 の埋土から出土した弥生土器である。3 5は完形に近い甕である。瀬戸内型甕、底部内面に粘土の付け足しが見られる。内外面ともに磨滅し、調整は不明である。器高は 2 7 cm である。時期は前期 II c 期と考えられる。3 6 ~ 4 7 は甕の底部である。3 6は底部内面に粘土を足している。3 7は底部を上げ底にしたものであり、底部が厚い。3 8は体部と底部の間に粘土の境目が見られることから、別々の粘土で制作したことがわかる。4 0は外面にミガキが見られる。4 1、4 2は底部内面に粘土を足している。4 3は底部を上げ底にしている。4 4 ~ 4 7 は胎土や焼成から香東川下流域産のもと推測できる。4 4は内面に板ナデが見られる。4 5 ~ 4 7 は胎土に角閃石や雲母を含む。4 8 ~ 6 3は口縁部である。4 8は口縁部に刺突文を有し、口縁や口縁端部内面に煤が付着する。時期は弥生時代前期後葉と考えられる。4 9は口縁部から体部にかけて残存している瀬戸内型甕で、体部には 1 2 条の沈線やヨコナデやタテハケを見られる。また、黒斑も見られる。時期は前期 II a 期と考えられる。5 0は口縁に近い部分はタテハケによる調整で、そこから体部にかけてはヨコナデによる調整が見られる。5 1は瀬戸内型甕である。5 2 ~ 6 3は胎土や焼成から香東川下流域産と考えられる。5 3の口縁部は屈曲に折れ曲がり、上部につまみ出している。内外面ともにナデ調整である。時期は弥生時代後期後葉と考えられる。5 4も5 3と同様な形状をしているが、外面にハケ目、内面に 1 条の沈線やヨコナデが見られる。時期は下川津 II 式と考えられる。5 5 ~ 5 8は内外面ともにナデ調整である。時期は5 5、5 7が下川津 I 式新相で5 6が下川津 I 式古相から新相と考えられる。5 9の口縁は緩く曲がり削り出されている。時期は下川津 I 式古層と考えられる。6 0は胎土に角閃石を有する。6 1は内外面ともにナデ調整をしている。6 2は口縁を摘み上げ、外面の一部にハケ目が見られるが内外面全体をナデ調整している。6 4 ~ 6 9は壺である。6 4は頸部で 7 条の貼り付け突帯を確認している。時期は弥生時代前期末~中期初頭と考えられる。6 5の外面はハケ調整後にナデ調整を行っている。6 6 ~ 6 9は胎土や焼成から香東川下流域産土器と考えられる。6 7は内外面ともにナデ調整で胎土に角閃石を含む。時期は下川津 I 式古相と考えられる。6 8は内外面ともにナデ調整で内面は粗めのナデ調整である。胎土に金雲母を含む。時期は弥生時代後期後半と考えられる。6 9は胎土に角閃石を含む。7 0 ~ 7 8は高杯である。7 0、7 1は脚部である。7 1は杯部が外れた状態の脚部である。内面はナデ調整や絞りを行っている。7 2 ~ 7 7は口縁部~体部である。また、7 3 ~ 7 7は胎土や焼成、技法等から香東川下流域産と考えられる。7 3、7 4は口縁が外反し、口縁上面が調整され、胎土に角閃石を含む。7 5は口縁が前者に比べ外反せず、立ち上がる。時期は下川津 II 式と考えられる。7 6は外面を分割でヘラミガキ調整やナデ調整がさ



第12図 第2調査区 SR 1002 平断面図

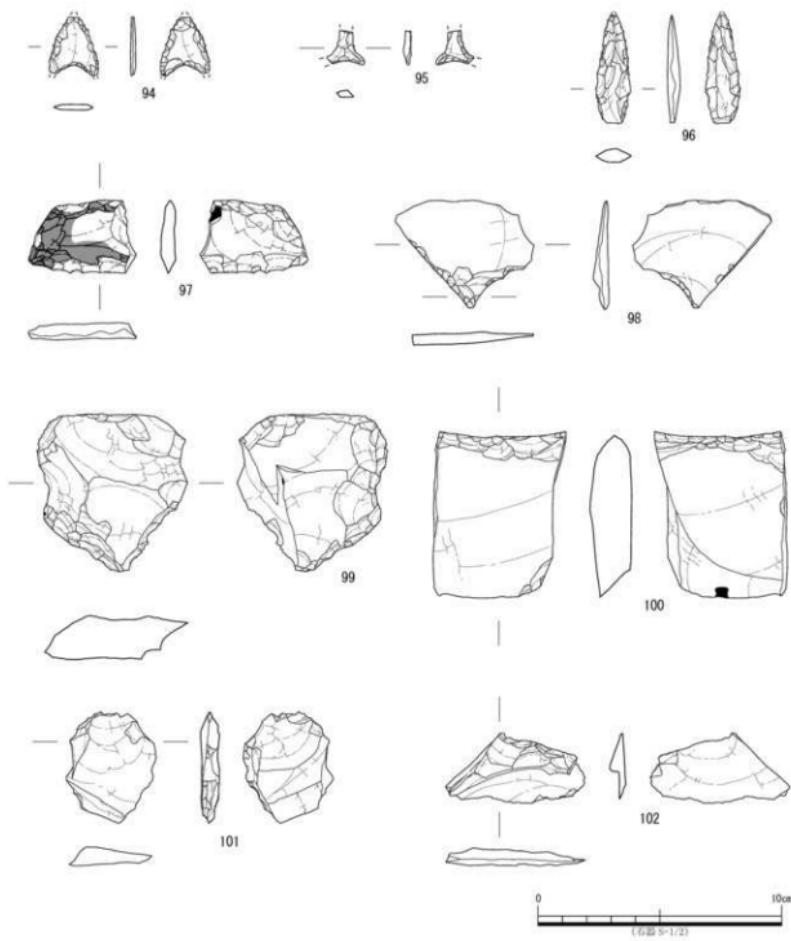


第13図 第2調査区 SR 1002 出土遺物①



第14図 第2調査区 SR 1002 出土遺物②

れ、内面もヘラミガキ調整が見られる。脚部と杯部の接合部に粘土盤の充填が見られる。時期は下川津I式新相と考えられる。77は脚部と杯部の接合部に粘土盤の充填が見られる。78は外面をナデ調整し、内面を脚部成形のためくり抜いた後ナデ調整を行っている。79～84は器種が不明確な弥生土器である。79は底部で粘土を接合した痕跡が見られる。80～83は体部である。80は外面に円形浮文2個、沈線10条が見られる。81は外面に貼り付け突



第15図 第2調査区 SR 1002 出土遺物③

帶が見られる。82は外面に8条の沈線と刺突文が見られる。82は他と比べ薄いが、外面に貼り付け突帶が見られる。84は甕又は壺の口縁部で2条の沈線が見られる。85は口縁部と考えられる。

86～93は須恵器である。86～89は杯身の口縁部である。86はかえりがあり、端部は内傾する。時期は6世紀初頭と考えられる。87～89は丸く受けのある口縁部で、7世紀初頭と考えられる。90は蓋の口縁部である。91は甕の口縁部である。92、93は体部で、

9 2 の外面は格子叩き具による整形、9 3 は外面を平行叩きによる整形、内面を青海波文のあて具痕が見られる。

9 4 ～ 1 0 2 は石器で、材質はいずれもサヌカイトである。9 4 ～ 9 6 は石鎌で、9 4 、9 5 は凹基式、9 6 は凸基 I 式である。9 7 はスクレイバーで使用痕が見られ、打製石包丁からの転用された可能性がある。9 8 は石錐である。9 9 は石核である。1 0 0 , 1 0 1 は剥片で一部に二次加工が見られる。1 0 2 は微細剥離痕のある剥片である。

また、図化していないが、土器焼成時に破損した土器の剥離片が出土している（写真7-3）。
SK 1 0 1 4 （第16図）

調査区東側で確認し、東西約0.8m×南北約0.6m、深さ約30cmである。断面形状はU字状で、にぶい黄褐色極細砂等が堆積している。

遺物は第16図-103・104の弥生土器が出土している。103は甕の口縁部である。時期は前期I cと考えられる。104は甕の口縁である。瀬戸内型甕で、3条の沈線が見られる。
SK 1 0 1 5 （第16図）

調査区東側で確認し、直径約0.8mで、深さ約30cmである。断面形状はU字状で、にぶい黄褐色極細砂等が堆積している。遺物は出土しなかった。

SK 1 0 1 6 （第16図）

調査区東側で確認し、遺構の北側を確認した。確認した規模は東西約1.1m×南北約0.8m、深さ約40cmである。断面形状はU字状で、灰黄褐色シルト～極細砂層が堆積している。埋土中に円礫を含み、遺物を多量に含む。

出土遺物は第16図-105～112である。いずれも弥生土器の甕である。105は底部から体部で内外面はナデ調整が見られる。106は完形の甕で瀬戸内型甕である。107～111は体部から口縁部である。107は外面にハケ目や黒斑が見られ、内面は指押さえである。108は外面に黒斑が見られ、内面は指頭圧痕がある。時期は中期II-1と考えられる。109は内外面ともにナデ調整である。110は外面に櫛描文、内面にヨコナデ調整が見られる。口縁部は如意型である。時期は前期II-b期と考えられる。111は外面に櫛描文とヨコナデ調整、内面にヨコナデ調整が見られる。瀬戸内型甕である。前期II-b期と考えられる。

SP 1 0 1 3 （第17図）

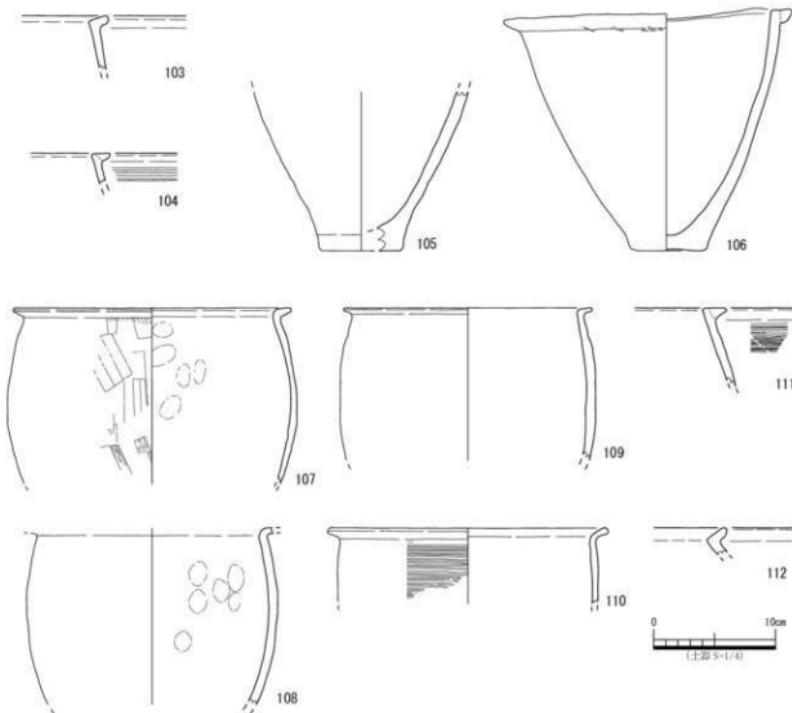
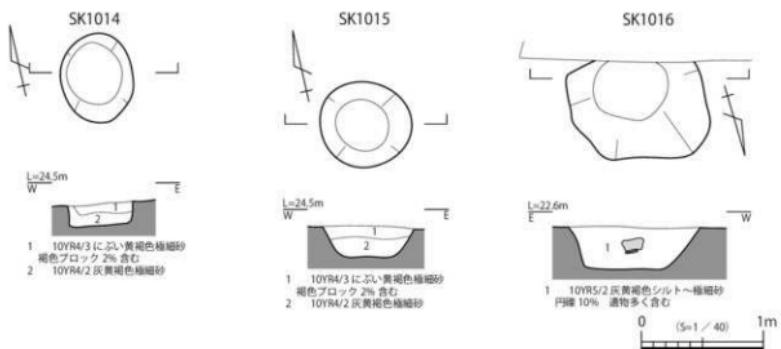
調査区東側で確認し、直径0.5m、深さ約20cmである。断面形状はU字状で、にぶい黄褐色極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

SP 1 0 1 4 （第17図）

調査区東側で確認し、直径0.5m、深さ約20cmである。断面形状はU字状で、にぶい黄褐色極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

遺構検出時出土遺物（第17図）

1面目の遺構検出中に第17図-113の弥生土器の甕の底部と114の須恵器杯身の底部



第16図 第2調査区 SK平面面図・出土遺物

が出土した。114の時期は8世紀頃と考えられる。

2) 2面目

SK2003 (第17図)

調査区東側で確認し、東西約0.5m×南北約1.0m、深さ約20cmである。断面形状は不整形な楕円形で、暗褐色細砂層が堆積している。

遺物は第17図-115が出土し、弥生土器の壺と考えられる口縁部である。口縁に刺突文が見られる。

第5節 第3調査区の遺構・遺物

第3調査区は第5調査区から南の地点で設定し、東西約5.0m×南北約3.0mである(第18図)。遺構面は3面確認し、他の調査区より遺構面が多い。1面目で確認した遺構はピット3基、包含層を1ヶ所確認した。2面目は土坑1基を確認した。3面目はピット2基を確認した。

1) 1面目

SP1015 (第19図)

調査区中央で検出し、東西約0.5m×南北約0.4m、深さ約10cmである。断面形状は楕円形で、にぶい黄褐色シルト質細砂層が堆積している。検出した位置が包含層1の下面であることから、2~3面の時期に相当する遺構の可能性もある。図化していないが土器片が出土した。

SP1016 (第19図)

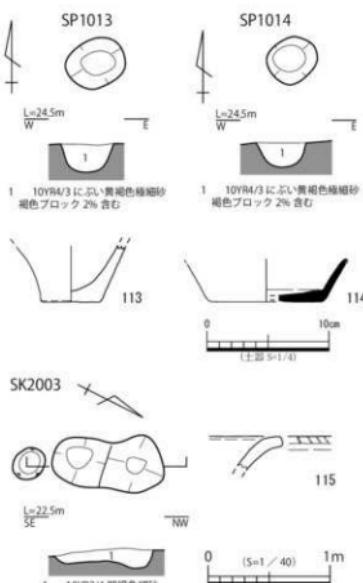
調査区中央で検出し、東西約0.6m×南北0.4m、深さ約30cmである。断面形状は方形で、暗褐色シルト質細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

SP1017 (第19図)

調査区西側で検出し、遺構の東側を確認した。直径約0.6mになると推測できる。断面から柱痕の痕跡が認められ、掘立柱建物の一部と考えられるが、調査範囲が狭小であることから対応する柱穴は検出されていない。遺物は出土しなかった。

包含層1 (第18図)

包含層1は調査区中央から東側にかけて検出し、第1面目で確認した。規模は調査区中央か

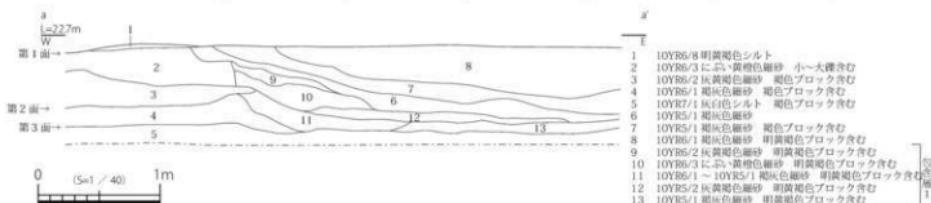
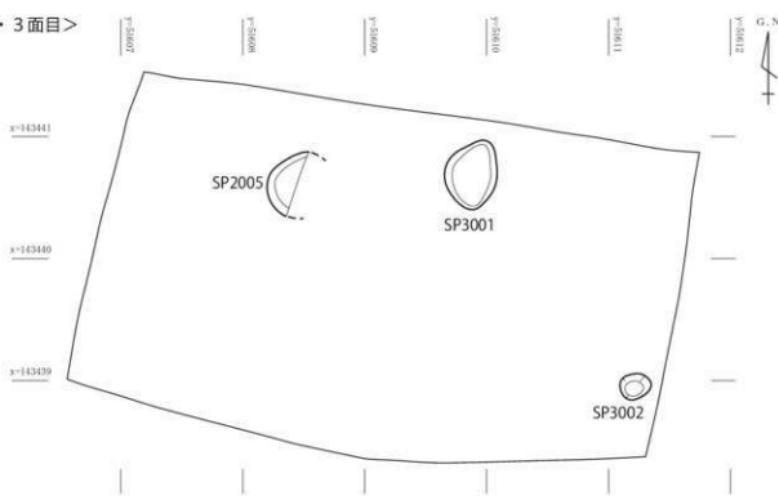


第17図 第2調査区 SP平面図・出土遺物、
遺構検出時出土遺物

< 1 面目 >



< 2・3 面目 >



第18図 第3調査区 遺構配置図 (1・2・3 面目)

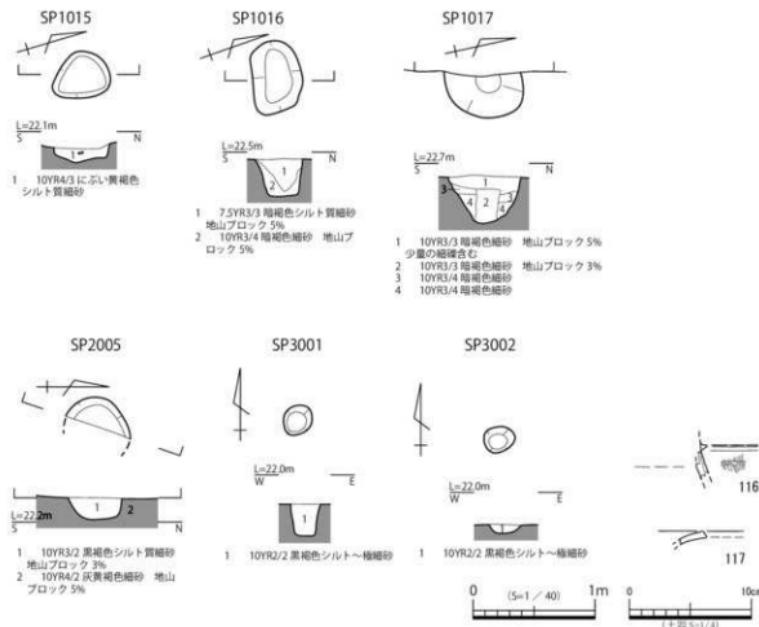
ら東側全面で確認し、深さは約60cmである。包含層は8層分の埋土からなり、いずれもレンズ状に堆積することから、自然堆積によるものと考えられる。埋土は褐灰色や灰黄褐色の土層が堆積し、8~13層で地山由来と考えられる明黄褐色ブロックを含んでいる。この包含層は第5調査区の南東隅で一部を確認しているが、第2調査区では確認していない。このことから、この包含層は5調査区を北限に東側に広がると推測できる。南限は調査を行っていないため不明である。

出土遺物は第19図-116で、弥生土器の壺の口縁部と考えられる。瀬戸内甕で、外面に沈線1条やヨコナデ、タテハケ調整が見られる。

2) 2面目

S P 2 0 0 5 (第19図)

調査区中央で検出し、遺構の西側を確認した。直径約0.6mと推測できる。深さは20cmである。断面形状はU字状で、黒褐色シルト質細砂が堆積している。遺物は出土しなかった。



第19図 第3調査区 S P 平断面図・出土遺物、遺構検出時出土遺物

3) 3 面目

S P 3 0 0 1 (第 1 9 図)

調査区中央で検出し、直径約 0.2 m、深さ約 30 cm である。断面形状は方形で、黒褐色シルト～極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 3 0 0 2 (第 1 9 図)

調査区中央で検出し、直径約 0.2 m、深さ約 10 cm である。断面形状はレンズ状で、黒褐色シルト～極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

遺構検出時出土遺物

遺構検出中に第 1 9 図 - 1 1 7 の弥生土器の壺の口縁部が出土した。

第 6 節 第 4 調査区の遺構・遺物

第 4 調査区は対象地の西側に設置し、東西約 1.5 m × 南北約 3.3 m で設定した（第 2 0 図）。また、北側の一部分は東西約 4 m の幅で調査区を設定した。遺構面は 1 面目で多数の遺構を検出し、確認した遺構は流路跡 1 条、溝跡 1 条、ピット 16 基である。遺構の多くは調査区中央から北側で確認し、中央から南側は S R 1 0 0 2 を全体的に確認した。2 面目は遺構は認められなかった。

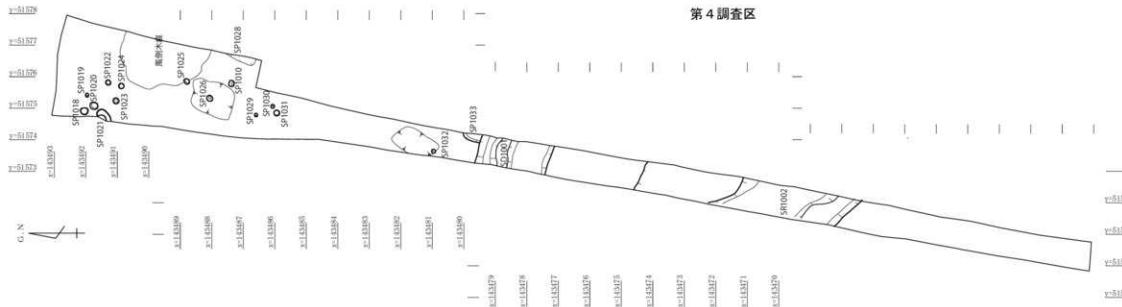
1) 1 面目

S R 1 0 0 2 (第 2 2 図)

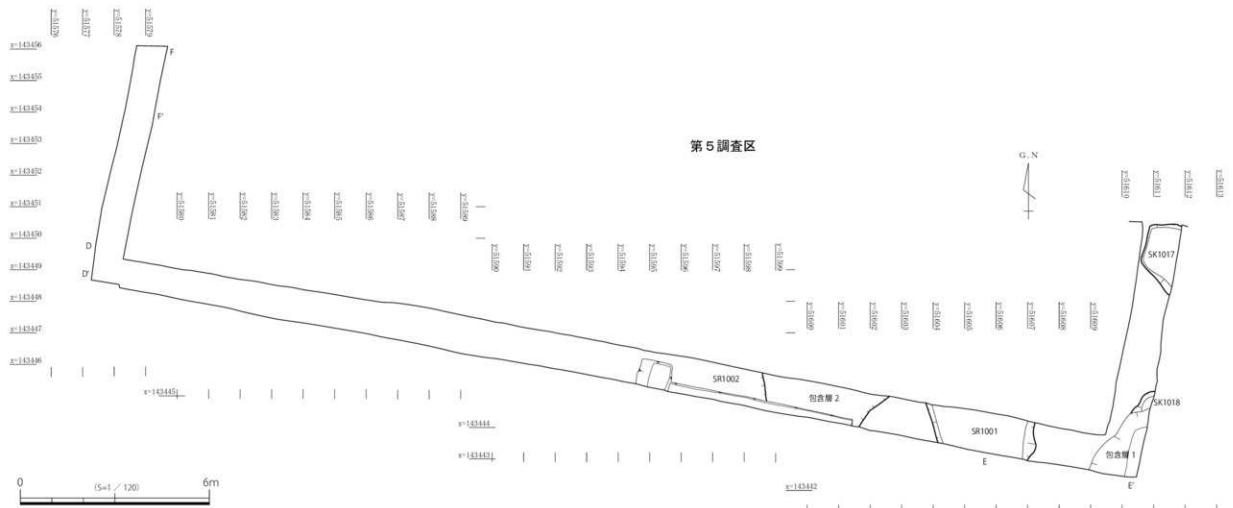
第 4 調査区で確認した S R 1 0 0 2 は調査区中央から南側で検出し、幅約 1.5.5 m、深さ約 60 cm である。流路の形状は第 2 調査区と同様、中心部が U 字状に深くなっている。土層の堆積構造は第 2 調査区とほぼ同様だが、ここでは細かく細分している。2a、2b 層がにぶい黄褐色シルト～砂質層で第 2 調査区でいう 3 層にあたる。2c 層は黒褐色粘質シルト層で円錐や多量の土器を含み、第 2 調査区の 4 層にあたる。3 層はにぶい黄褐色粘土層である。4a 層は黒褐色粘質シルトで砂礫を含み、4b 層は黒褐色粘質シルト層である。3 層、4a 層、4b 層は第 2 調査区の 5 層にあたる。5 層は黒色シルトで遺物を含み、第 2 調査区の 6 層にあたる。6 層は黄灰色砂層で遺物を含み、5 層の埋土をラミナ状に含む。第 2 調査区でいう 9 ～ 11 層にあたる。流路方向は NW - S E 方向になり、第 2 調査区から主軸が西に傾く。

出土遺物は第 2 3 図 - 1 1 8 ～ 1 4 4 である。弥生土器、須恵器、石器が出土した。1 1 8 ～ 1 4 2 は弥生土器で甕や壺、高杯が出土した。

1 1 8 ～ 1 2 4 は第 5 層より下層の流路底場から出土した。1 1 8 は甕の体部から口縁部である。口縁は如意型で刻目文が見られる。外面は沈線 3 条やヨコナデ調整、煤が見られる。内面は指頭圧痕や板ナデ調整が見られる。時期は前期 II a 期と考えられる。1 1 9 ～ 1 2 1 は壺の体部から口縁部である。1 1 9 は頸部に沈線 6 条が見られ、内面は板ナデ調整である。1 2 1 は口縁部内面に煤が付着している。1 2 2 は壺の体部で外面に沈線 3 条が見られる。時

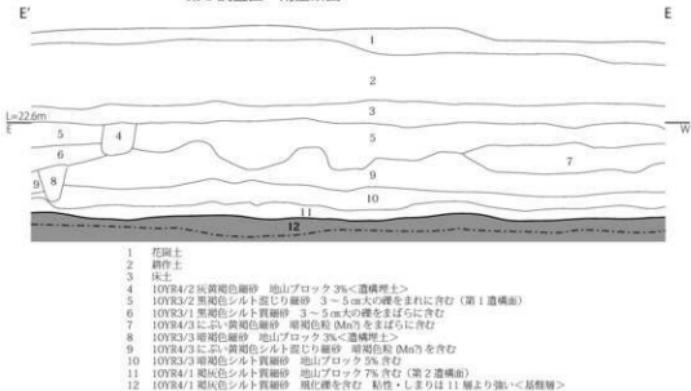


第4調査区



第5調査区

第5調査区 南壁断面

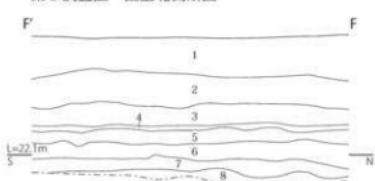


第5調査区西 西壁南側断面



0 (S=1 / 40) 1m

第5調査区 西壁北側断面

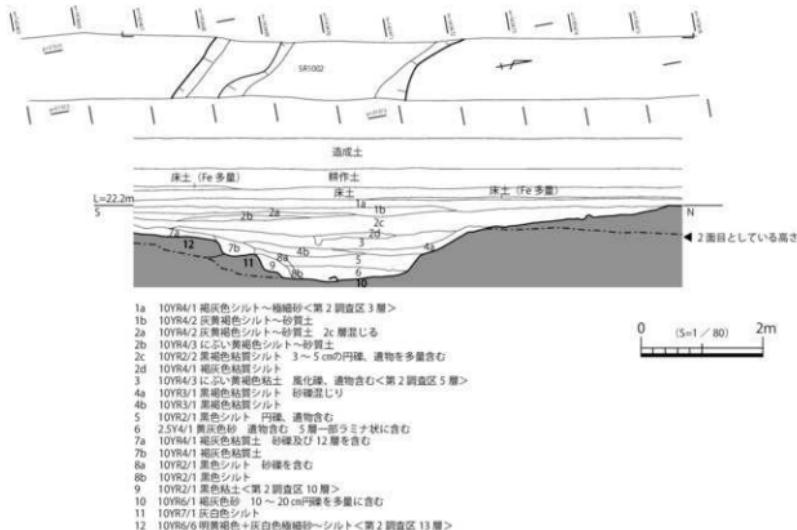


第21図 第5調査区 断面図

期は前期II-a期と推定できる。123は壺の底部である。124は甕又は壺の口縁部で、外面に煤が付着している。

125～144はSR1002の一括埋土から出土した遺物である。125～142は弥生土器の甕、壺、高杯である。125～127は甕の底部である。125は外面に指頭圧痕が見られ、内外面にナデ調整が見られる。127の底部は上げ底を行っている。128は体部で外面はナデ調整、内面は板ナデやヨコハケ調整が見られる。129、130は口縁部である。129は外面にハケ目が見られる。時期は下川津II式と考えられる。132～135は壺である。133の外面は板ナデ調整で内面はハケ目の後板ナデ調整を行っている。134は体部で押圧突帯文が見られる。時期は中期II-2と考えられる。135は胎土に黒雲母を含み、内外面にヨコナデ調整が見られる。138～142は高杯である。138は脚部で胎土に角閃石を含む。140は脚部で外面はナデ調整、内面は指押さえが見られる。また、円盤充填をしている可能性がある。141、142は脚部から杯身部の部分である。141は中心部にあった円盤充填が外れたものである。142は脚部の形状は垂直に立ち上がる。

143、144は須恵器である。143は杯身の底部である。144は甕の口縁部だが、他の須恵器に比べ軟質である。



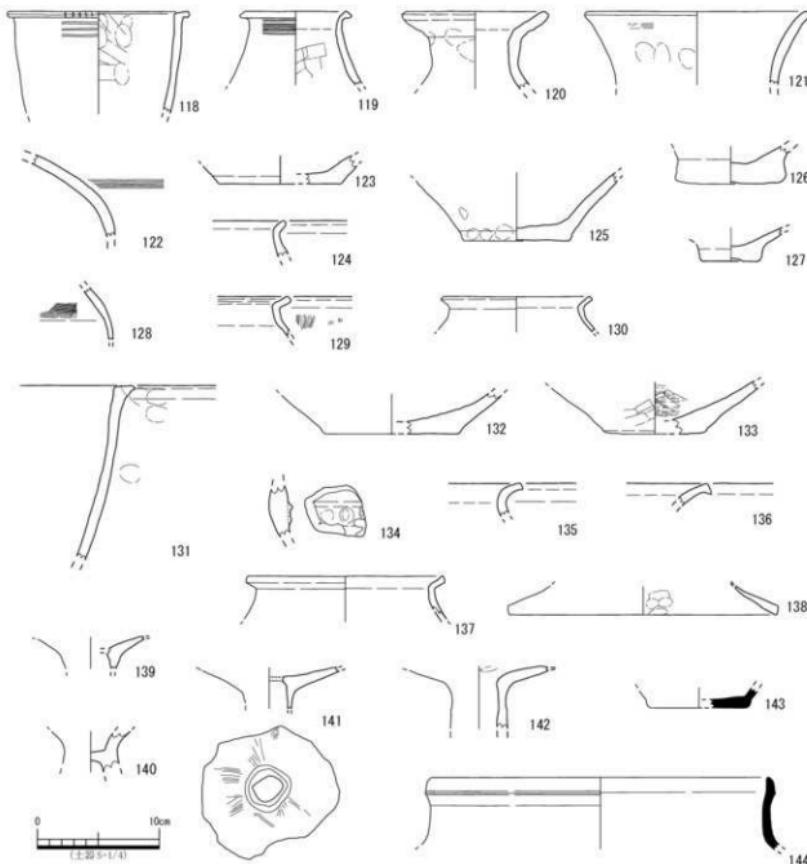
第22図 第4調査区 SR 1002 平断面図

S D 1 O 1 7 (第25図)

調査区中央で確認し、幅2.3mで東西方向に延びる溝である。図化していないが、須恵器や土師器が出土していた。

S P 1 O 1 8 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2m、深さ約10cmである。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。



第23図 第4調査区 S R 1002 出土遺物

S P 1 O 1 9 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.1m、深さ約10cmである。断面形状はV字状で、にぶい黄橙色極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 O 2 0 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2m、深さ約10cmである。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器が出土した。

S P 1 O 2 1 (第24図)

調査区北側で遺構の東側を確認した。規模は直径約0.5mと推測できる。深さは約5cmである。断面形状は不整形なレンズ状で、にぶい黄橙色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 O 2 2 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2m、深さは約10cmである。断面形状は方形で、にぶい黄橙色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 O 2 3 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2m、深さ約10cmである。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 O 2 4 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2m、深さ約5cmである。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 O 2 5 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2m、深さ約10cmである。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器が出土している。

S P 1 O 2 6 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2m、深さ約10cmである。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 O 2 7 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2m、深さ約5cmである。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

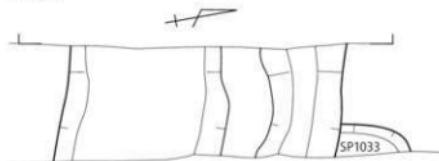
S P 1 O 2 8 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.2mである。遺物は出土しなかった。

S P 1 O 2 9 (第24図)

調査区北側で確認し、直径約0.1m、深さ約10cmである。断面形状は方形で、にぶい黄橙色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

SD1017



L=22.5m

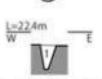


- N
1 10YR7/3 に近い黄褐色シルト質堆積砂 (底白色細砂を少量含む)
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト質堆積砂 (底白色細砂を少量含む)
3 10YR6/2 黄褐色シルト質堆積砂 (底白色細砂・地山粒を少量含む)
4 10YR6/1 褐灰褐色シルト質堆積砂 (底白色細砂を少量含む)
5 10YR6/2 灰黄褐色シルト質堆積砂 (地山を 20% 含む)

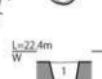
SP1018

1 10YR5/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

SP1019

1 10YR7/2 に近い黄
褐色シルト質堆積砂

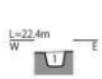
SP1020

1 10YR6/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

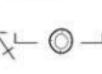
SP1021

1 10YR7/2 に近い黄
褐色シルト質堆積砂

SP1022

1 10YR7/2 に近い黄
褐色シルト質堆積砂

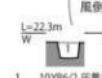
SP1023

1 10YR6/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

SP1024

1 10YR6/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

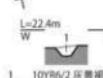
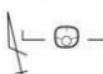
SP1025

1 10YR6/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

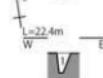
SP1026

1 10YR6/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

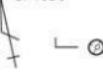
SP1027

1 10YR6/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

SP1029

1 10YR7/2 に近い黄
褐色シルト質堆積砂

SP1030

1 10YR7/2 に近い黄
褐色シルト質堆積砂

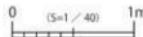
SP1031

1 10YR6/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

SP1033

1 10YR6/2 灰黄褐色
シルト質堆積砂

SP1032



第24図 第4調査区 S P・S D断面図

S P 1 0 3 0 (第 2 4 図)

調査区北側で確認し、直径約 0.1 m、深さ約 1 cm である。断面形状はレンズ状で、にぶい黄橙色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 3 1 (第 2 4 図)

調査区北側で確認し、直径約 0.2 m、深さ約 10 cm である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 3 2 (第 2 4 図)

調査区中央で確認し、直径約 0.2 m、深さ約 1 cm である。遺物は出土しなかった。

S P 1 0 3 3 (第 2 4 図)

調査区中央で確認し、西側半分を検出した。遺構の南側は S D 1 0 1 7 に切られている。検出した部分は東西約 0.4 m × 南北約 0.7 m、深さ約 5 cm である。断面形状はレンズ状で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

第 7 節 第 5 調査区の遺構・遺物

第 5 調査区は調査区南側に「コ」の字状に設定した調査区である(第 2 0 図)。調査区は、東西方向の部分は東西約 3.1 m × 南北約 1.5 m で南北方向の部分は両方とも東西約 1.5 m × 南北約 8 m である。1 面目は流路跡 2 条、土坑 2 基、包含層 2 ヶ所を確認した。2 面目では遺構は認められなかった。

S R 1 0 0 1 (第 2 0 図)

調査区東側で幅 5.6 m 確認した。断面の図化していないが第 2 調査区で確認した部分に比べ深さが浅くなり、5 ~ 10 cm の深さになる。この流路跡は南に向いて、浅くなると考えられる。また、遺物は出土していないことから土器が破棄された或いは埋没した地点に偏りがあると推測できる。

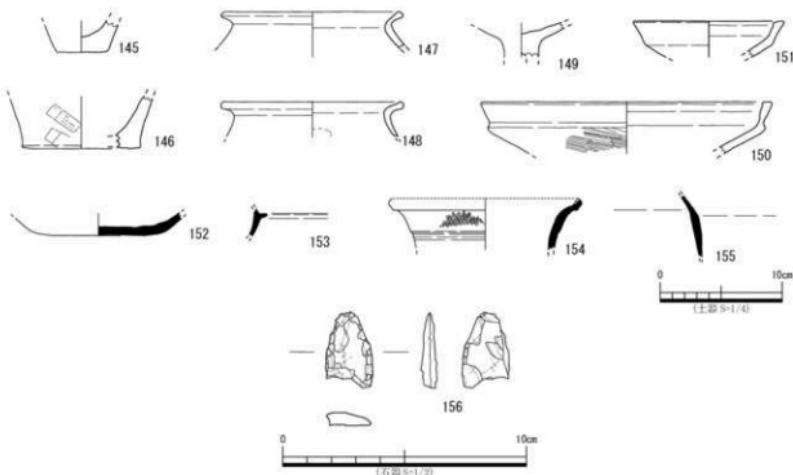
S R 1 0 0 2 (第 2 0 図)

調査区中央から西側にかけて幅広く確認した。この流路跡も南側に向かい浅くなる傾向にある。流路跡の主軸としては北東流する部分と考えられる。また、東側では包含層 2 を切っている。

遺物は第 2 5 図 - 1 4 5 ~ 1 5 6 が出土し、弥生土器や須恵器、石器がある。

1 4 5 ~ 1 5 1 は弥生土器である。1 4 5 、 1 4 6 は甕の底部である。1 4 5 は内外面ともにナデ調整で外面に黒斑が見られる。1 4 6 は外面にハケ目、ナデ調整が見られ、外面に黒斑が見られる。

1 4 7 、 1 4 8 は甕の口縁部である。1 4 7 は胎土に金雲母を含む。1 4 8 は胎土に角閃石を含む。1 4 9 ~ 1 5 1 は高杯である。1 4 9 は脚部から杯部にかけてで、粘土充填が見られない技法のタイプである。1 5 0 、 1 5 1 は杯部である。1 5 0 の外面にヨコナデやヘラミガキ調整が見られ、胎土に金雲母や角閃石を含む。1 5 1 は小型の高杯で胎土に角閃石を含む。



第25図 第5調査区 S R 1002 出土遺物

152～154は須恵器で杯身、壺、堤瓶が出土した。152、153は杯身である。152は底計の推定値が10.4cmと大型のもと考えられる。153は杯身の口縁部でかえりがある。154は壺の口縁部から頸部の部分で、頸部に波状文が見られる。155は堤瓶の体部である。

156は石鐵の未製品で材質はサヌカイトである。

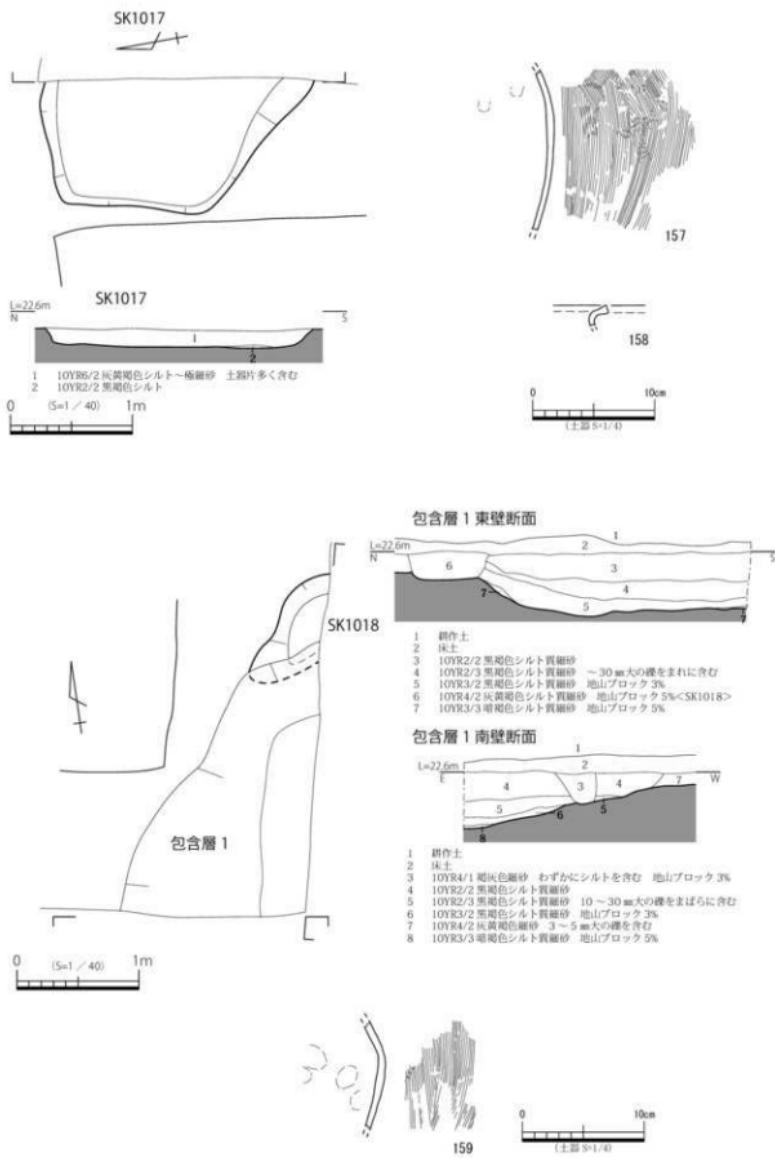
SK 1017 (第26図)

調査区東側で確認し、遺構の西半分を検出した。確認した規模は東西約1.1m×南北約2.2m、深さ約15cmである。断面形状はレンズ状で、灰黄褐色シルト～極細砂層が堆積している。遺構からは多数の土器片が確認され、近接して第2調査区で確認されたSK 1016と同じ性格の遺構と推測できる。

出土した遺物は第26図-157、158で弥生土器である。157は甕の体部で、外面はハケ調整があり、内面は指ナデ調整が見られる。時期は下川津II式と考えられる。158は甕の口縁部である。

SK 1018 (第26図)

調査区東側で確認し、遺構の西半分を確認した。確認した規模は東西約0.5m×南北約0.7m、深さ約20cmである。断面形状はU字状で灰黄褐色シルト質細砂層が堆積している。南側の包含層1を切っている。



第26図 第5調査区 SK1平断面図・出土遺物

遺物は第26図-159の弥生土器が出土した。甕の体部で外面は縦ハケ調整で、内面は指押さえである。

包含層1（第26図）

包含層1は調査区東側で確認した。確認した規模は東西約1.6m×南北約2.1mを確認した。第3調査区で確認した包含層1と同一のものと考えられる。一連の包含層は第2調査区では確認されていないことから大よその北限と推測できる。また、断面観察のみになるが、南側断面でピットの掘り込みが確認されている。

包含層2（第20図）

包含層2は調査区東側で確認され、東側を確認した。

確認した規模は北側の最大幅3.6mで南側の最小幅で3.0mである。包含層の西側はSR1002により切られている。

遺物は第27図-160お弥生土器の甕底部が出土した。

2) 2面目

遺構は確認しなかったが、第28図-161の弥生土器が出土した。瀬戸内型甕である。

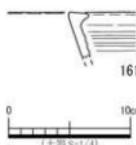
沈線3条が見られる。

3) 表探遺物

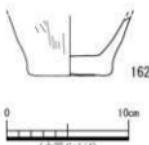
調査区全体の表探資料で第29図-162があり、弥生土器の甕の底部である。



第27図 第5調査区 包含層出土遺物



第28図 第5調査区 遺構検出時出土遺物



第29図 表探遺物

第4章　まとめ

第1節　遺構の変遷

今回の発掘調査では弥生時代前期後半～前期末に形成されたと考えられる遺構を多数確認した。多くの遺構は1面目の旧地表面で形成され、僅かであるが、2面目でも遺構を確認した。

1面目

今回の発掘調査で最も多くの遺構を検出した面である。時期は弥生時代前期後半から弥生時代後期後半にかけての遺構がほとんどである。いくつかの遺構で時代が特定できるものがある。前期I c期に属する遺構は第5調査区SK1017が挙げられる。前期IIa～IIc期にかけての遺構は第1調査区SK1012、第2調査区SR1001、SK1015が挙げられる。

前期末から中期II-1にかけての遺構として第2調査区SK1016が挙げられる。

SR1002は2時期にかけて埋没したと考えられ、1回目の埋没時期（6層）は弥生時代後期後半と考えられ、2回目の埋没時期は須恵器の編年から7世紀初頭ごろに埋没したと考えられる。

2面目

第1調査区を中心に確認したSD2001、SK2001等の遺構や第2調査区のSK2003等が挙げられる。2面目の遺構から時代を特定できる遺物が出土していないが、1面目で確認される最も古い遺構が弥生時代前期後半（前期I c期）であることから、この時期より古いと考えられる。

また、第3調査区では3面の遺構面を確認している。いずれの面も時代を特定できる遺物はないが、1面目は他の調査区と同一レベルで遺構面を確認していることから同時期に形成されたと考えられる。しかし、2、3面目はどの時期に形成された遺構であるかは不明である。

第2節　SK1012の土器焼成遺構の可能性について

第1調査区1面目で確認したSK1012は、土坑の北側半分を調査し、埋土の状況や出土遺物から弥生時代前期末頃に使用された土器焼成遺構と推測される土坑である。埋土は5層で焼成による硬化面を確認し、3層で炭化物を含む層位で堆積した。土器は3層より上面で多量に出土した。また、少量であるが焼けた粘土塊が出土し、焼成遺構として使用された痕跡と考えられる。また、今回の調査で検出したSR1002からは土器を焼成する際に破裂したと思われる土器片が出土しており、周辺で土器焼成を行っていた可能性を指摘できる。出土した土器の年代は前期I c、IIa期と若干時期差があり、最終使用は前期IIa期と考えられる。

一方で、SK1012が土器焼成遺構と断定できない理由がいくつかある。1つ目にSK1012で出土した遺物に焼成時に不良品と考えられる破裂した土器片が出土していない。2つ目にSR1002で出土した破裂した土器片が必ずしもSK1012に伴うとは限らない。3つ目に時期差がある土器が出土していることから複数回の使用が推測されるが、前期I c

期から前期Ⅱa期（弥生時代前期後半頃か）に同一位置で複数回にわたって土器を焼成した痕跡は今回の調査では不明である。4つ目に遺構の半分しか調査できておらず、全容が把握できていないという問題点がある。

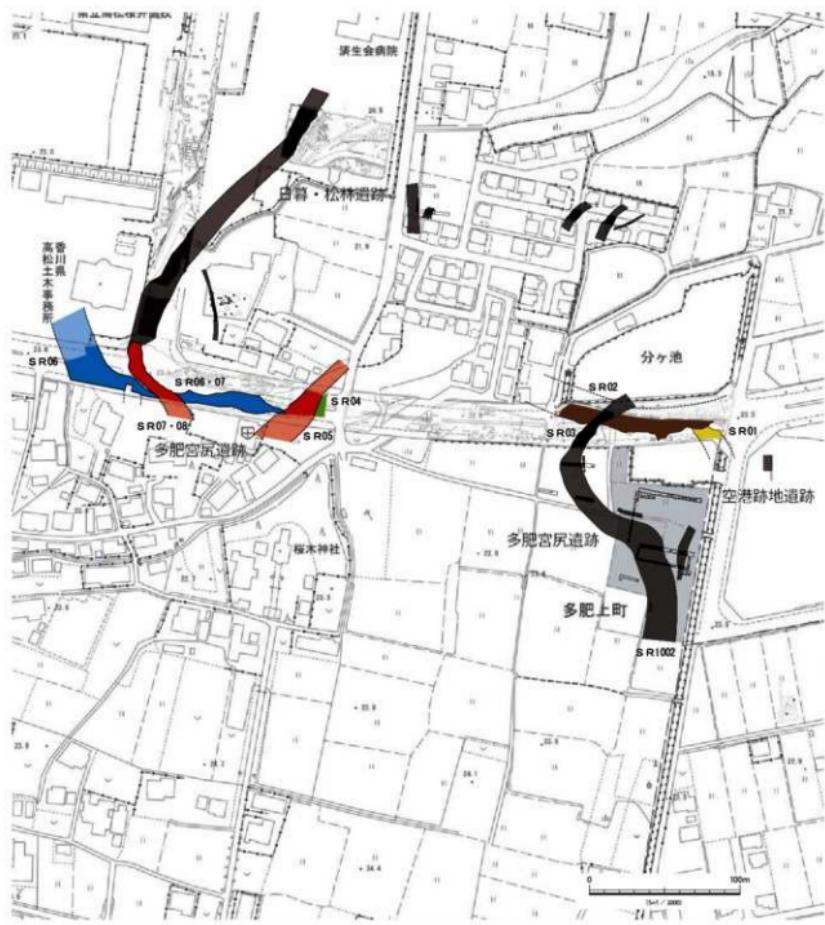
以上のことから、SK1012は弥生時代前期後半頃の土器焼成遺構と断定はできないものの、遺構の状況や出土遺物から焼成遺構として可能性は指摘できる。SR1002で出土した土器片がSK1012に伴わないものとしても周辺で土器焼成を行っていた可能性があり、今後の調査によって明らかにできることを期待する。

第3節 多肥宮尻遺跡周辺の流路跡について

今回の発掘調査で弥生時代の住居跡や流路跡等を確認したが、本節では周辺の発掘調査成果と比較し、多肥宮尻遺跡の性格について述べる。多肥宮尻遺跡周辺の流路跡は空中写真判読等から分析がされている（木下、山元2018）。多肥宮尻遺跡周辺の流路跡は平面形を観察すると著しく蛇行しているものがある。一般的に扇状地上の河道は直線状、その下流側に広がる自然堤防帶の河道は蛇行することが知られている。これは、砂礫質の地盤では直線状、砂やシルトが卓越する地盤では蛇行すると言い換えられる。つまり、これらの旧河道が流下した年代は、扇状地の形成が終了し、その上面を細粒堆積物が覆った時代である可能性が考えられる。高橋学氏は瀬戸内海沿岸の臨海平野の形成過程について分析し、縄文時代後期から晩期にかけて扇状地帯及び三角州帯の一部において自然堤防を構成する砂・シルトが堆積することを指摘している。香東川扇状地上の特徴的な平面形をもつ河道の形成過程に関係する可能性がある。

周辺の調査事例として当該地の北側で香川県教育委員会が県道建設工事に伴い多肥宮尻遺跡の発掘調査を行っている（木下、山元2018）。このうち遺構の対比できるのが位置関係等から今回の調査で確認したSR1002と香川県教育委員会の調査で確認したSR1003である。香川県教育委員会で調査したSR03は6世紀初頭から7世紀前半までに埋没したと考えられる。SR1002の最終埋没時期は7世紀代であることから、遺構の整合性が保てる。この流路跡は当該調査地の東側で実施した試掘調査でも確認でき、第30図のような経路をたどると考えられる（大嶋ほか2017）。

今回の調査地以外に周辺の流路跡を確認した遺跡は多肥宮尻遺跡や日暮・松林遺跡、空港跡地遺跡で確認できる（第30図）。これらの流路跡は香川県教育委員会が分析した流路跡の復元図とほぼ一致するが、発掘調査でより細かく流路跡の形成を読み解くことができた。都市計画道路建設工事に伴う多肥松林遺跡で検出したSR02は須恵器や土師質土器、白磁等多数の土器が出土した（山本・中西1997）。埋没過程は3時期確認され、古墳時代後期から埋没が始まり、中世初頭に完全に埋まった。また、香川県教育委員会が実施した県道建設工事に伴う多肥宮尻遺跡では上記で記したSR03以外に7本の流路跡を検出した。SR01は出土遺物から縄文時代晩期末から弥生時代前期前葉の時期に位置し、最も古い時期の流路跡である。S



第30図 周辺遺跡流路位置図

R O 2は縄文時代晩期末から弥生時代前期前葉、弥生時代前期中葉、弥生時代後期前葉を主体とした遺物が出土した。S R O 3は6世紀末から7世紀前半までに埋没した。S R O 4は古代の流路跡、S R O 5は近世の流路跡と考えられる。S R O 6～O 8は遺構が重複した形で確認した。S R O 6は2時期の堆積過程を確認し、下層は弥生時代中期中葉、中層は弥生時代後期前半、弥生時代後期終末から古墳時代前半、古墳時代後期の遺物が混在する。S R O 7は古墳時代後期の遺物が主体である。S R O 8は古代～中世にかけての遺物が出土した。遺構の変遷はS R O 1→O 2→O 6→O 7→O 3→O 4→O 8→O 5となる。空港跡地遺跡は試掘調査で東西軸の流路跡を確認した（大嶋ほか2016）。

周辺の流路跡を比較すると埋没時期が併行関係にある流路跡は日暮・松林遺跡S R O 2と県道建設工事に伴う調査した多肥宮尻遺跡S R O 8のみである。基本的には埋没した流路跡の後に自然的あるいは人工的に新たな流路跡が設定される傾向にある。自然流路は当時の人々の生活に欠かせないものと考えられ、常に維持管理や新設が図られたと推測される。このように流路跡が長期間にわたり複数箇所認められた要因として自然的要因や人工的要因により流水状況が変化したと考えられる。自然的要因は洪水による流路の埋没や出水⁽¹⁾の枯渇等が推測できる。近世以前に出水を利用した灌漑施設の可能性はすでに指摘され、当時の人々も活用した可能性がある（木下、山元2018）。人工的要因は集落域の移動等が考えられる。多肥宮尻遺跡をはじめ周辺の日暮・松林遺跡、空港跡地遺跡では集落の形成時期が異なることから、集落の中心地に向け流路を引いた可能性がある。周辺遺跡で今回調査した流路跡と同時期になる溝跡は複数カ所確認でき、自然流路との関連性は不明だが、流路から生活用水等に使用されたと推測される。いずれもの可能性も周辺遺跡の再評価や今後の発掘調査により実態の解明が求められる。

（1）出水とは香川県固有の名称で、井戸を掘って用水を湧出させ用水路で下流に灌漑する施設である。

第4節　まとめ

1) 遺構について

今回の調査は弥生時代前期後半～前期末、弥生時代後期を中心とした遺構・遺物を確認した。顕著な遺構として流路跡（S R 1 0 0 2）や土器焼成遺構と考えられる土坑（S K 1 0 1 2）等を検出した。流路跡は周辺の調査と比較することができ、自然流路の一端を復元することができた。土器焼成土坑は調査例が少ないと等から断定できないが、当時の生活状況を知る上で重要な遺構と考えられる。また、住居跡が1棟のみしか検出できなかつたのは当該地が空港跡地周辺の地形から台地の縁辺部にあたることを考慮すると集落域の外れであると推測できる。

2) 遺物について

遺物は弥生時代前期後半から中期初頭、弥生時代後期後半頃の弥生土器や須恵器等が出土した。弥生時代前期後半から中期初頭（前期 I c 期～中期 I a 期）にかけての弥生土器は多様な施文が施される。中には口縁部に接して突帯を張り付ける所謂瀬戸内型甕が確認できる。

弥生時代後期頃の弥生土器は S R 1 0 0 2 を中心に下川津 I 式、II 式を中心に出土し、弥生時代後期前半頃ものが多い。中には下川津 I 式よりも古相と考えられる土器も確認される。（第 13 図 - 3 2 等）。これらの土器は南谷 I ～ II 式頃のものと併行関係の時期と考えられ、弥生時代後期前葉頃と推測するが、小片であることから断定はできない。弥生時代後期の土器は角閃石を含み胎土が比較的よく、色調が褐茶色系の土器が多く、いわゆる香東川下流域産土器と考えられる。中には金雲母が含有する土器もある。しかし、すべての土器で角閃石を含有していない。今回は含有率の割合や器種ごとの分析ができなかったが、角閃石を有する土器は搬入品である可能性がある。

参考文献

- 山本英之・中西克也 1997 『日暮・松林遺跡・都市計画道路福岡多肥上町線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
高松市教育委員会
- 川畠聰・小川賢 2004 『多肥宮尻遺跡・宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市教育委員会
- 大橋和則 2006 『多肥宮尻遺跡・衣料品販売店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市教育委員会
- 大橋和則ほか 2016 「空港跡地道路」『高松市内道路発掘調査概報－平成27年度国庫補助事業－』高松市教育委員会
- 大橋和則ほか 2017 「多肥宮尻遺跡」『高松市内道路発掘調査概報－平成28年度国庫補助事業－』高松市教育委員会
- 木下晴一・山元泰子 2018 『多肥宮尻遺跡・県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
香川県教育委員会

表1 遺物観察表①

SH1001(第1調査区) 土器一覧												
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調	埴土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面			
1 墓土	胎生土器	甕?	口縁	-	-	11.3	ヨコナラ	ヨコナラ	L.SVBR/4L25 イ・黄	骨	1mm以下の右灰・灰石 を含む	良

SK1012(第1調査区) 土器一覧												
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調	埴土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面			
2 墓土	胎生土器	甕	口縁～体部	-	-	11.9	横屈圧後ナラ、 内縁3条	横屈圧後ナラ、 内縁3条	L.SVBR/3L25 イ・黄	骨	4mm以下の右灰・灰石 を多量に含む	良
3 墓土	胎生土器	甕	口縁	(20.6)	-	8.6	ヨコナラ、縫合ナラ、 摩滅	ヨコナラ、縫合ナラ、 摩滅	L.SVBR/3L25 イ・黄	骨	2mm以下の黒色化。 4mm以下の右灰・灰石・ 赤色化、5mm以下の砂 粒含む。	良
4 墓土	胎生土器	甕	口縁	-	-	9.6	ヨコナラ、輪ナラ、 縫合	ヨコナラ、輪ナラ、 縫合	L.SVBR/4L25 イ・黄	骨	1.5mm以下の赤色化。 6mm以下の中粒含む	良
5 墓土	胎生土器	甕	口縁～肩	-	-	13.6	ヨコナラ、縫合ナラ、 内縁3条	ヨコナラ、縫合ナラ、 内縁3条	L.SVBR/1地灰 L.SVBR/1褐色	骨	3mm以下の中灰・赤色 化	良
6 墓土	胎生土器	不明	肩	-	-	14.5	ナラ、沈縫2条	ナラ、沈縫2条	L.SVBR/4L25 イ・黄	骨	3mm以下の中灰・赤色 化	良
7 墓土	胎生土器	甕	口縁	-	-	12.1	ナラ、摩滅	ナラ、摩滅	L.SVBR/6相	骨	3mm以下の中灰・灰石・ 赤色化	良
8 墓土	胎生土器	不明	体部(突起)	-	-	22.0	ナラ、輪ナラ、 縫合、内縁3条	ナラ、輪ナラ、 縫合、内縁3条	L.SVBR/6相 L.SVBR/3L25 イ・黄	骨	4mm以下の中灰・灰石 を多量に含む	良

SK1012(第1調査区) 石器一覧										
遺物番号	出土遺構	種別	石材	法量				備考		
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
9 墓土	小鏡	サスカイ	-	2.65	-	3.3	0.45	2.5		

SR1001(第2調査区) 土器一覧												
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調	埴土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面			
10 第4層	胎生土器	甕	底部	-	(8.9)	15.6	ナラ	ナラ	L.SVBR/3L25 イ・黄	骨	1mm以下の中灰・灰石 を多量に含む	良
11 第4層	胎生土器	甕	底部	-	(6.6)	14.2	ナラ、ハケ目	ナラ	L.SVBR/4L25 イ・黄	骨	1mm以下の中灰・赤色化。 3.5mm以下の中粒含む	良
12 墓土	胎生土器	甕	底部	-	6.6	13.2	ナラ	横屈圧後ナラ	L.SVBR/4L25 イ・黄	骨	4mm以下の中灰・灰石 を多量に含む	良
13 墓土	胎生土器	甕	底部	-	(7.1)	14.2	ナラ	ナラ、横屈圧後ナラ	L.SVBR/4L25 イ・黄	骨	1mm以下の中灰・赤色化。 外周付着物 を多量に含む	良
14 墓土	胎生土器	甕	底部	-	-	10.8	ナラ、縫合、剥離	ナラ、剥離	L.SVBR/4L25 イ・黄	骨	3mm以下の中灰・灰石 を多量に含む	良
15 墓土	胎生土器	甕	口縁	-	-	10.6	ナラ、沈縫2条	ナラ	L.SVBR/3L25 イ・黄	骨	6mm以下の中灰・灰石 を多量に含む	良
16 墓土	胎生土器	甕	口縁	-	-	10.6	ナラ、剥離	ナラ、剥離	L.SVBR/3L25 イ・黄	骨	1mm以下の中灰・灰石 を多量に含む	良
17 墓土	胎生土器	甕	口縁	-	-	12.6	ナラ	ナラ	L.SVBR/2L25 イ・黄	骨	3mm以下の中灰・灰石 を多量に含む	良
18 墓土	土師質土器	平底	脚部	0.95	11.0	11.4	ナラ	-	L.SVBR/6相	-	1mm以下の中灰色。 3.5mm以下の中粒・長 石・砂粒含む	良

SR1002(第2調査区) 土器一覧												
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調	埴土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面			
19 第6層	胎生土器	甕	底部	-	2.3	-	ナラ	横屈圧後ナラ	L.SVBT/3L25 イ・黄	骨	8mm以下の中灰・灰石 を多量に含む	良
20 第6層	胎生土器	甕	底部	-	(6.4)	13.1	ナラ	ナラ、粘土接合 部	L.SVBT/3L25 イ・黄	骨	3mm以下の中灰・灰石 を少量含む	良
21 第6層	胎生土器	甕	底部	-	(6.6)	13.2	ナラ、ヨコナラ	横屈圧後ナラ	L.SVBT/3L25 イ・黄	骨	4mm以下の中灰・灰石・ 赤色化を含む	良

表2 遺物観察表②

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考	
					口径	底径	標高	外面	内面	外側				
22	第6層 陶生土器	甕	底部	-	5.5	[5.8]	ナゲ、摩滅	ナゲ、摩滅	10YR6/7灰黄 10YR6/7灰黄 明	地白含む	良	不良		
23	第6層 陶生土器	甕	体部	25.5 4.9	幅5.5 4.9	厚5.0 0.9	縫5 縫ハケ	ナゲ	N3/暗灰 2.5YR6/2灰黄	4mm以下の灰青・灰白 を含む	良	表面無施釉		
24	第6層 陶生土器	甕	(3.3)	-	[4.0]		ナゲ、剥離、円 孔、鉢	ナゲ、剥離	2.5YR6/4灰白 2.5YR6/3灰黄	4mm以下の灰青・灰白 を含む	良	底部埋付部		
25	第6層 陶生土器	甕	体部	-	-	[10.2]	へづれ	ナゲ、摩滅	2.5YR6/4灰黄 2.5YR6/2灰黄	3mm以下のみG、6mm 以上のみ白を含む	良			
26	第6層 陶生土器	甕	口縁	-	-	[2.8]	ナゲ、剥離	剥離ナゲ	10YR6/4灰白 2.5YR6/4灰 白	1mm以下のみ白・地白 を含む	良			
27	第6層 陶生土器	不明	口縁	-	-	[2.0]	ナゲ	ナゲ	7.5YR6/7灰白 2.5YR6/6灰	5mm以下のみ白・赤色 を含む	良			
28	第6層 陶生土器	甕	底部	-	8.0	[8.5]	ナゲ	ナゲ	2.5YR6/4灰黄 10YR6/7灰白 N3/暗灰	4mm以下のみ赤色・ 5mm以下のみ白・灰白 を含む	良	表面無施釉 輪動接合部		
29	第4層 陶生土器	甕	底部	-	[9.0]	[17.6]	ナゲ	ナゲ、剥離	10YR6/3灰黄 2.5YR6/2灰白	6mm以下のみ灰白・灰 青を含む	良			
30	第4層 陶生土器	甕	底部	-	[7.0]	[13.0]	ナゲ	ナゲ、剥離	10YR6/3灰白 2.5YR6/4灰 白	8.5mm以下のみ白・ 5mm以下のみ白を含む	良			
31	第4層 陶生土器	甕	体部	-	-	[10.2]	ヨコナゲ、剥離	ヨコナゲ、剥離	5YR6/5明赤 2.5YR6/2灰白	1mm程度の赤色・内 外共に5mm以下のみ を含む	良			
32	第4層 陶生土器	甕	口縁	-	-	[2.0]	ヨコナゲ、剥離	ナゲ	7.5YR6/7灰白 2.5YR6/6灰	5mm程度の赤色・内 外共に5mm以下のみ を含む	良			
33	第4層 陶生土器	製陶土器	脚部	-	-	[4.2]	剥離	脚部剥離ナゲ	10YR6/4灰黄 2.5YR6/3灰白	4mm以下のみ灰白 を含む	良			
34	第4層 陶生土器	製陶土器	脚部?	-	[3.7]	[3.8]	ナゲ	ナゲ	5YR6/5明赤 2.5YR6/4灰 白	1mm程度の角開き・ 3mm以下の白青を含む	良	合板有 輪動接合部		
35	堆土	陶生土器	甕	完形	[22.2]	[7.0]	27.0	ナゲ、摩滅	摩滅	5YR6/6灰	10YR6/6	良	3mm以下のみ白・長石 を含む	
36	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[9.0]	[4.7]	ナゲ、摩滅	ナゲ、摩滅	2.5YR6/4灰白 2.5YR6/1灰	1~3mm以上の白青を 含む	不良	底部内面粘 土斑点	
37	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[7.0]	[5.0]	摩滅	摩滅	10YR6/3灰 白	3mm以下のみ白・長石 を含む	良		
38	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[6.0]	[3.8]	摩滅、ナゲ	摩滅、ナゲ	10YR6/3灰 白	3mm以下のみ白・長石 を含む	良	輪動接合部	
39	堆土	陶生土器	甕	底部～体部	-	[8.0]	[6.7]	ナゲ	摩滅	10YR6/3灰白 2.5YR6/3灰白	1~3mmの白・長石・ 白色砂を含む	良		
40	堆土	陶生土器	甕	底部	-	5.6	[4.3]	カギ、摩滅	摩滅	10YR6/3灰白 2.5YR6/1灰 白	2mm以下のみ白・長石 を含む	良	表面無施釉	
41	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[6.0]	[4.9]	摩滅	摩滅	10YR6/3灰白 2.5YR6/3灰白	2mm以下のみ白・長石 を含む	良	輪動接合部	
42	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[6.0]	[5.5]	摩滅	摩滅	10YR6/3灰 白	3mm以下のみ白・長石 を含む	良		
43	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[9.0]	[3.8]	摩滅、剥離	摩滅	10YR6/3灰白 2.5YR6/3灰白	2mm以下のみ白・長石 を含む	良		
44	堆土	陶生土器	甕	底部	-	6.8	[3.4]	ナゲ	板ナゲ、ナゲ	5YR6/6赤褐色	1mm以下のみ白 を含む	良	表面無施釉	
45	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[5.0]	[2.2]	摩滅	摩滅	10YR6/3灰白 2.5YR6/3灰白	2mm以下のみ白・長石 を含む	良	表面無施釉	
46	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[6.0]	[2.9]	ナゲ	摩滅	10YR6/4灰 白	2.5YR6/6灰	良	1mm以下のみ白・長石 を含む	
47	堆土	陶生土器	甕	底部	-	[5.0]	[2.2]	摩滅	摩滅	7.5YR6/4灰白 2.5YR6/4灰 白	2mm以下のみ白・長石 を含む	良	底部黒化	
48	堆土	陶生土器	甕	口縁	[17.0]	-	[7.0]	ヨコナゲ、ナゲ 脚付(日光 丸)	ヨコナゲ、ナゲ	2.5YR6/4灰 白 2.5YR6/3灰 白	2mm以下のみ白・長石 を含む	良	口縫部内 窓模様化	
49	堆土	陶生土器	甕	口縁～体部	[19.0]	-	[10.2]	ヨコナゲ、次第に 変化、剥離	ナゲ	7.5YR6/4灰白 2.5YR6/4灰 白	2mm以下のみ白・長石 を含む	良	表面有 窓模様化	
50	堆土	陶生土器	甕	口縁～体部	[16.0]	-	[9.0]	ヨコナゲ、ヨコ ナゲ、ナゲ、摩滅	ヨコナゲ、モロ ナゲ	5YR6/6赤褐色 2.5YR6/4灰白 2.5YR6/3灰白	3mm以下のみ白・長石 を含む	良	表面内 窓模様化	
51	堆土	陶生土器	甕	口縁	-	-	[3.2]	ナゲ後剥離	ナゲ後剥離	2.5YR6/4灰白 2.5YR6/4灰 白	3mm以下のみ白・長石 を含む	良	輪動接合部	
52	堆土	陶生土器	甕	口縁	-	-	[3.1]	ヨコナゲ	ヨコナゲ	2.5YR6/4灰白 2.5YR6/4灰 白	2mm以下のみ白・長石 を含む	良		
53	堆土	陶生土器	甕	口縁	[14.0]	-	[4.0]	ナゲ	ナゲ	10YR6/3灰白 2.5YR6/3灰 白	3mm以下の白・長石・ 黑色砂を含む	良		

表3 遺物観察表③

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考		
					口径	底径	標高	外面		内面					
								外縁	内縁	外縁	内縁				
54	埋土	陶生土器	甕	口縁	[12.6]	—	[2.9]	エコナデ、ハケ口	エコナデ、ナデ	10YR8/4G-12.6 10YR8/4G-12.6 10YR8/4G-12.6	10YR8/4G-12.6 10YR8/4G-12.6 10YR8/4G-12.6	白 毛穴	良好		
55	埋土	陶生土器	甕	口縁	[16.40]	—	[3.2]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	2mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白	良		
56	埋土	陶生土器	甕	口縁	—	—	[3.1]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白・赤	良		
57	埋土	陶生土器	甕	口縁	—	—	[3.0]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白	良		
58	埋土	陶生土器	甕	口縁	—	—	[3.1]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白	良		
59	埋土	陶生土器	甕	口縁	—	—	[3.1]	掌縫	掌縫	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白	良		
60	埋土	陶生土器	甕	口縁	—	—	[2.4]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白	良		
61	埋土	陶生土器	甕	口縁	—	—	[3.0]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白	良好		
62	埋土	陶生土器	甕	口縁	[12.0]	—	[2.6]	エコナデ、ナデ、 エコナデ、ナデ	エコナデ、ナデ、 エコナデ、ナデ	10YR8/4G-12.0 10YR8/4G-12.0 10YR8/4G-12.0	10YR8/4G-12.0 10YR8/4G-12.0 10YR8/4G-12.0	10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白	良		
63	埋土	陶生土器	甕	口縁	—	—	[3.1]	エコナデ、ナデ	エコナデ、ナデ	10YR8/4G-12.6 10YR8/4G-12.6 10YR8/4G-12.6	10YR8/4G-12.6 10YR8/4G-12.6 10YR8/4G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白	良		
64	埋土	陶生土器	甕	縁部	—	—	[3.5]	縦筋付筒形束	掌縫	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白	良		
65	埋土	陶生土器	甕	口縁	[18.0]	—	[3.8]	ナデ、ハケ端付	掌縫	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白	良		
66	埋土	陶生土器	甕	体部	—	—	[10.0]	掌縫	掌縫	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1の赤褐色・2mm 10mm±1の赤褐色・2mm 10mm±1の赤褐色・2mm	良		
67	埋土	陶生土器	甕	口縁	[10.0]	—	[3.4]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1の黒葉・赤褐色、 2mm±1以下の右黒・黄白 2mm±1以下の右黒・黄白	良		
68	埋土	陶生土器	甕	口縫～体部	[11.0]	—	[3.1]	エコナデ、ナデ	ナデ	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白 2mm±1下の右黒・黄白	良	黒斑有	
69	埋土	陶生土器	甕	口縁	—	—	[3.2]	ナデ	掌縫	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
70	埋土	陶生土器	甕	口縫	低底	—	[1.8]	ナデ後縫部	掌縫	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	2mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
71	埋土	陶生土器	甕	縁部	—	—	[4.1]	ナデ、指押印ナデ	ナデ、指押印ナデ	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白 10mm±1下の右黒・黄白	良		
72	埋土	陶生土器	甕	口縫	—	—	[3.8]	掌縫	横縫ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
73	埋土	陶生土器	甕	口縫	—	—	[3.3]	掌縫	掌縫	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の赤褐色・ 4mm±0.5下の右黒・黄白	良		
74	埋土	陶生土器	甕	口縫	—	—	[3.0]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
75	埋土	陶生土器	甕	口縫	—	—	[3.3]	掌縫	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
76	埋土	陶生土器	甕	身～脚部	—	—	[5.0]	分割へたり口、 ナデ、摩擦	ヘラシガキ、摩擦	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	3mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
77	埋土	陶生土器	甕	身～脚部	—	—	[4.5]	ナデ	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	3mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
78	埋土	陶生土器	甕	身～脚部	—	—	[5.4]	箇押印ナデ	箇押印ナデ	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	3mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
79	埋土	陶生土器	不明	底底	—	—	[5.7]	[3.5]	ナデ	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
80	埋土	陶生土器	不明	体部	—	—	[5.7]	ナデ、凹削浮き、 横縫ナデ	摩擦	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良	軽土後合模	
81	埋土	陶生土器	不明	体部	—	—	[2.8]	ナデ、縦筋付筒形束	ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	3mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
82	埋土	陶生土器	不明	体部	—	—	[3.8]	刺痕葉、側面沈 縫	掌縫	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	2mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
83	埋土	陶生土器	不明	体部	—	—	[3.6]	掌縫	掌縫	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	3mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
84	埋土	陶生土器	蟲の巣	口縫	—	—	[1.6]	掌縫	掌縫ナデ	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6 7.0YR8/G-12.6	3mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
85	埋土	陶生土器	蟲の巣	口縫	—	—	[3.4]	掌縫	掌縫	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6 10YR8/G-12.6	10mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
86	埋土	須志器	身身	口縫	—	—	[3.9]	回転ナデ	回転ナデ	NH/R NH/R	NH/R NH/R	3.5mm±1下の右黒・黄白 3.5mm±1下の右黒・黄白	良		
87	埋土	須志器	身身	口縫	—	—	[1.9]	回転ナデ	回転ナデ	NH/R NH/R	NH/R NH/R	1mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		
88	埋土	須志器	身身	口縫	[13.0]	—	[2.1]	回転ナデ	回転ナデ	NH/R NH/R	NH/R NH/R	3mm±1下の右黒・黄白・ 赤褐色を含む	良		

表 4 遺物観察表④

SR1002(第2調査区) 土器一覧													
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面			
89	埋土	須志器	平身	口縁	-	-	[2.6]	円筒ナダ、内凹	円筒ナダ	Nd/Rc	Nd/Rc	昔 1mm以下の石英・長石を含む	良好
90	埋土	須志器	蓋	口縁	-	-	[2.6]	円筒ナダ	円筒ナダ	Nd/Rc	Nd/Rc	昔 1mm以下の中石英・長石を含む	良
91	埋土	須志器	裏	口縁	-	-	[2.3]	円筒ナダ	円筒ナダ	DYB/1灰	DYB/1灰	昔 1mm以下の中石英・長石を含む	良
92	埋土	須志器	不明	体部	-	-	[3.4]	施子目切	ナダ、工具痕	Nd/Rc	Nd/Rc	精 細緻な石英・長石含む	良好
93	埋土	須志器	不明	体部	-	-	[6.7]	平行印付	当て具痕(青青痕)	Nd/Rc	Nd/Rc	昔 2mm以下の中石英・長石を含む	良好

SR1002(第2調査区) 石器一覧												
遺物番号	出土遺構	種別	石材	部位	法量				備考			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	外面	内面	外面	内面
94	埋土	石錐	サスカイト	-	[2.8]	-	0.2	1.2	田基式、刀削痕			
95	埋土	石錐	サスカイト	-	[1.8]	[1.00]	0.2	0.4	田基式			
96	埋土	石錐	サスカイト	-	1.8	1.4	0.55	3.30	内基式			
97	埋土	スカラベイマー	サスカイト	-	3.0	4.4	0.63	11.30	使用痕有、打削跡丁寧の軸類の可能性有			
98	埋土	石錐	サスカイト	-	4.4	5.7	0.63	11.60				
99	埋土	石錐	サスカイト	-	6.4	6.1	1.3	92.6				
100	埋土	鋸片	サスカイト	-	6.8	5.4	1.7	98.3	一級二次加工有			
101	埋土	鋸片	サスカイト	-	3.8	3.7	0.25	15.30	二級加工有			
102	埋土	鋸片	サスカイト	-	2.85	5.7	0.7	8.4	鋼錐形鋸有			

SK1014(第2調査区) 土器一覧													
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面			
103	埋土	須生土器	裏	口縁	-	-	[4.4]	ヨコナダ	ヨコナダ	10YR6/4C-5/2 黄褐色	10YR6/4C-5/2 黄褐色	昔 3mm以下砂跡有含む	良
104	埋土	須生土器	裏	口縁	-	-	[2.8]	ヨコナダ、沈鉢3 条	ヨコナダ	7.5YR6/4C-5/2 黄褐色	7.5YR6/4C-5/2 黄褐色	2.5mm以下の石・長石含む	良

SK1016(第2調査区) 土器一覧													
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面			
105	埋土	須生土器	裏	底部～体部	-	(6.6)	[13.0]	ナダ、摩滅	ナダ	10YR6/4C-5/2 黄褐色	10YR6/4C-5/2 黄褐色	昔 6mm以下の石英・長石含む	良
106	埋土	須生土器	裏	完形	22.8	6.3	[9.3]	ナダ、工具痕	ナダ	DYB/6灰	DYB/6灰	昔 6mm以下砂粒有含む	良
107	埋土	須生土器	裏	口縁～体部	[22.7]	-	[14.4]	ヨコナダ、ハケ目	ヨコナダ、滑擦有	5.5YR6/4C-5/2 黄褐色	5.5YR6/4C-5/2 黄褐色	昔 6mm以下砂粒有含む	良
108	埋土	須生土器	裏	口縁～体部	[9.8]	-	[14.4]	ナダ	ナダ	10YR6/4C-5/2 黄褐色	10YR6/4C-5/2 黄褐色	昔 6mm以下の石英・長石含む	良
109	埋土	須生土器	裏	口縁～体部	[18.0]	-	[12.6]	ヨコナダ	ナダ	10YR6/4C-5/2 黄褐色	10YR6/4C-5/2 黄褐色	6mm以下砂粒有含む	良
110	埋土	須生土器	裏	口縁	[22.6]	-	[8.2]	ヨコナダ、側擦痕 横穴式火炎4条	ヨコナダ	10YR6/4C-5/2 黄褐色	10YR6/4C-5/2 黄褐色	2mm以下の赤色有含む	良
111	埋土	須生土器	裏	口縁	-	-	[8.5]	側擦痕4条	ナダ	10YR6/4C-5/2 黄褐色	10YR6/4C-5/2 黄褐色	昔 6mm以下砂粒有含む	良
112	埋土	須生土器	裏	口縁	-	-	[2.2]	ヨコナダ	ヨコナダ	10YR6/4C-5/2 黄褐色	10YR6/4C-5/2 黄褐色	昔 6mm以下砂粒有含む	良

遺構検出(第2調査区) 土器一覧													
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面			
113	遺構検出	須生土器	裏	底部	-	4.8	[4.5]	ナダ、摩滅	ナダ、摩滅	10YR6/6相	10YR6/6相	6mm以下の石英・長石含む	良
114	遺構検出	須生器	平身	底部	[13.0]	[9.2]	[3.1]	ヨコナダ、滑擦	ヨコナダ	N7/灰白	N7/灰白	昔 3mm以下の石英含む	良

表5 遺物観察表⑤

包含層(第3調査区) 土器一覧														
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
116	遺物包含層	陶生土器	壺?	口縁	-	-	[3.2]	ヨコナギ、斜付穴 口付、斜ハタ、注湯口付	厚底	GVRG-6灰赤 GVRG-6灰	GVRG-6灰 GVRG-6灰	良	3mm以下の石英・長石 を含む	良

SK2003(第2調査区) 土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
115	土壌	陶生土器	壺?	口縁	-	-	[2.8]	口付、斜ハタ、注湯口付	厚底	GVRG-6灰 GVRG-6灰	GVRG-6灰 GVRG-6灰	良	4mm以下の石英・長石 を含む	良

遺構検出時(第3調査区) 土器一覧

116	遺構検出	陶生土器	壺?	口縁	-	-	[1.1]	ヨコナギ	ヨコナギ	GVRG-6灰黒	GVRG-6灰	良	1mm以下の中性地、 2mm以下の中長石、 3mm以下の中長石を含む	良
-----	------	------	----	----	---	---	-------	------	------	----------	---------	---	--	---

SR1002(第4調査区) 土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
118	第6層	陶生土器	壺	口縁～体部	[14.7]	-	[8.3]	ナヨコナギ、斜 ハタ、注湯口付	ナゲ、板ナゲ、 ナゲ	GVRG-6灰黒 GVRG-6灰	GVRG-6灰黒 GVRG-6灰	良	4.3mm以下の中長石、 3mm以下の中長石を含む	良
119	第6層	陶生土器	壺	口縁～体部	[8.2]	-	[6.1]	ナゲ、沈溜丸条、 ナゲ	ナゲ	GVRG-6灰黒 GVRG-6灰	GVRG-6灰黒 GVRG-6灰	良	4mm以下の中長石を含む	良
120	第6層	陶生土器	壺	口縁	[11.0]	-	[6.3]	曲面付、ナゲ	ナゲ	GVRG-6灰黒 GVRG-6灰	GVRG-6灰黒 GVRG-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
121	第6層	陶生土器	壺	口縁	[18.0]	-	[6.0]	ナゲ付、斜ハタ、 ナゲ	ナゲ	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
122	第6層	陶生土器	壺	体部	-	-	[6.7]	ナゲ、沈溜丸条、 ナゲ	ナゲ	GVRG-6灰黒 GVRG-6灰	GVRG-6灰黒 GVRG-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
123	第6層	陶生土器	壺	底部	-	[10.0]	[2.3]	ナゲ厚底	ナゲ	2.5VRY-6灰黒 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰黒 2.5VRY-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
124	第6層	陶生土器	不明	口縁	-	-	[2.9]	ナゲ、厚底	ナゲ、厚底	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
125	土壌	陶生土器	壺	底部	-	[8.6]	[8.6]	ナゲ、横斜丸	ナゲ	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
126	土壌	陶生土器	壺	底部	-	[8.0]	[3.1]	ナゲ、横ナゲ	ナゲ	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
127	土壌	陶生土器	壺	底部	-	[8.0]	[1.7]	ナゲ	ナゲ	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
128	土壌	陶生土器	壺	体部	-	-	[4.2]	ナゲ	ナゲ、ナゲ、 横ハタ	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	良	0.3mm以下の中長石、 3mm以下の中長石を含む	良
129	土壌	陶生土器	壺	口縁	-	-	[3.3]	ナゲ付、ヨコナギ	ヨコナギ	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	良	3mm以下の中長石、 3mm以下の中長石を含む	良
130	土壌	陶生土器	壺	口縁	[12.0]	-	[2.0]	ナゲ、厚底	ナゲ	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	2.5VRY-6灰 2.5VRY-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
131	土壌	陶生土器	壺	口縁～体部	-	-	[14.3]	曲面付後ナゲ	ナゲ	2.5VRY-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
132	土壌	陶生土器	壺	底部	-	[10.0]	[3.1]	ナゲ、厚底	ナゲ、厚底	2.5VRY-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
133	土壌	陶生土器	壺	底部	-	[8.0]	[3.2]	ナゲ、横ナゲ	ナゲ、厚底	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
134	土壌	陶生土器	壺	体部	[4.2]	[1.0]	[3.0]	斜付穴、厚底	ナゲ	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	0.3mm以下の中長石、 3mm以下の中長石を含む	良
135	土壌	陶生土器	壺	口縁	-	-	[2.7]	ヨコナギ	ヨコナギ	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
136	土壌	陶生土器	壺	口縁	-	-	[1.8]	ナゲ、厚底	ナゲ、厚底	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
137	土壌	陶生土器	壺	口縁	[16.0]	-	[3.7]	ナゲ、厚底	ナゲ	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
138	土壌	陶生土器	壺	口縁	-	[22.6]	[2.4]	ナゲ、横斜丸	ナゲ、横斜丸	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
139	土壌	陶生土器	壺	口縁	-	-	[2.6]	ナゲ、厚底	ナゲ、厚底	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	3mm以下の中長石を含む	良
140	土壌	陶生土器	壺	口縁	-	-	[3.2]	ナゲ、厚底	ナゲ、厚底、厚 壁付	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	円盤文様	
141	土壌	陶生土器	壺	口縁	-	-	[3.3]	ヘラ七ガタ、厚底	厚底	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	6mm以下の中長石を含む	良
142	土壌	陶生土器	壺	口縁	-	-	[3.1]	ヨコナギ	ナゲ、横斜丸	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	6mm以下の中長石を含む	良
143	土壌	須恵器	壺	口縁	-	[6.0]	[3.2]	回転ナゲ	回転ナゲ	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	6mm以下の中長石を含む	良
144	土壌	須恵器	壺	口縁	-	[13.0]	[3.8]	ヨコナギ、厚底	ヨコナギ、厚底	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	2.5VYR-6灰 2.5VYR-6灰	良	2mm以下の中性地、 3mm以下の中長石を含む	良

表 6 遺物観察表⑥

SR1002(第5調査区) 土器一覧															
遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考	
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
145	埋土	陶生土器	甕	底部	-	(3.1)	[2.6]	ナゲ、摩滅	ナゲ、摩滅	2.5V7/2灰黄	2.5V7/2灰黄	骨	3mm以下の石英・灰石・黒鉛を含む。	良	
146	埋土	陶生土器	甕	底部	-	(9.7)	[8.3]	ナゲ、ナヶ日	ナゲ	2.5V6/3灰白	2.5V6/3灰白	骨	3mm以下の中粒。	良	
147	埋土	陶生土器	甕	口縁	(14.0)	-	[3.7]	ナゲ、摩滅	ナゲ、摩滅	10V9S/6灰黄	10V9S/6灰黄	骨	1mm程度の石英・灰石・金剛石を含む。	良	
148	埋土	陶生土器	甕	口縁	(7.3)	-	[2.6]	ナゲ、摩滅	ナゲ、摩滅	10V6S/6灰黄	10V6S/6灰黄	骨	1mm以下の中粒。	良	
149	埋土	陶生土器	高杯	外身～脚部	-	-	[2.6]	ナゲ、摩滅	ナゲ、摩滅	3V9S/6灰白	3V9S/6灰白	骨	1mm程度の石英・灰石・金剛石を含む。	良	
150	埋土	陶生土器	高杯	外身	(23.7)	-	[4.3]	ヨナダ、ヘラミ 等	ヨナダ	10V9S/6灰白	10V9S/6灰白	骨	1mm以下の中粒。	良	
151	埋土	陶生土器	高杯	外身	(12.0)	-	[2.8]	ヨロナダ、摩滅	ヨロナダ	2.5V6/3灰白	2.5V6/3灰白	骨	1mm以下の中粒。	良	
152	埋土	陶生土器	高杯	底部	-	(10.4)	[3.8]	ヨロナダ	ヨロナダ	2.5V7/1灰白	2.5V7/1灰白	骨	2mm以下の中粒・灰石・角閃石を含む。	良	
153	埋土	陶生土器	高杯	身	口縁	-	-	[2.2]	ヨロナダ	ヨロナダ	NG/灰	NG/灰	骨	0.5mm以下の黒鉛。	良
154	埋土	陶生土器	高杯	身	口縁	(13.0)	-	[4.2]	ヨロナダ、剥落 等	ヨロナダ	NG/灰	NG/灰	骨	1mm以下の中粒。	良好
155	埋土	陶生土器	高杯	底部	-	-	[3.0]	ヨロナダ	ヨロナダ	10V9C/1灰白	10V9C/1灰白	骨	1mm以下の中粒。	良	

SR1002(第5調査区) 石器一覧

遺物番号	出土遺構	種別	石材	法量				備考			
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
156	埋土	石器	ナヌカイト	3.1	2.0	0.6	3.6				

SK1017(第5調査区) 土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
157	埋土	陶生土器	甕	体部	-	-	[13.2]	ハケ目	ナゲ、摩滅	2.5V6/3灰白	2.5V6/3灰白	骨	3mm以下の中粒。	良
158	埋土	陶生土器	甕	口縁	-	-	[1.2]	ナゲ	ナゲ	3V9S/6灰	3V9S/6灰	骨	1mm以下の中粒。	良

SK1018(第5調査区) 土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
159	埋土	陶生土器	甕	体部	-	-	[9.0]	黒ヘケ	黒ヘケ	3V9S/6灰	3V9S/6灰	骨	3mm以下の中粒。	良

包含層(第5調査区) 土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
160	埋土	陶生土器	甕	底部	-	(8.2)	[6.6]	ハケ目	ナゲ	2.5V7/1灰白	2.5V7/1灰白	骨	3mm以下の中粒。	良

遺構検出時(第5調査区) 土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
161	遺構中	陶生土器	甕	口縁	-	-	[3.8]	摩滅(底部)等 (壁部摩滅)	摩滅	2.5V6/6灰	2.5V6/6灰	骨	3mm以下の中粒。	良

表探 土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
162	表探	陶生土器	甕	底部	-	(6.7)	[3.8]	ナゲ、ナヶ日	摩滅	2.5V9C/6灰	2.5V9C/6灰	骨	3mm以下の中粒。	良

写 真 図 版



1 第1調査区1面目（東から）



5 SK 1009 断面（南から）



2 SK 1002 断面（南から）



6 SK 1012 遺物出土状況（北から）



3 SK 1002 全景（南から）



7 SK 1012 断面（北から）



4 SK 1008 断面（南から）



8 SK 1012 完整（北から）



1 SP 1001 断面（北から）



5 第1調査区2面目全景（西から）



2 SP 1003 断面（南から）



6 SD 2001 断面（南から）



3 SP 1003 完掘（南から）



7 SD 2001 完掘（西から）



4 SH 1001 全景（南から）



8 SK 2001 完掘（北から）

写真図版

3



1 第1調査区 A-A' 断面（北から）



5 第2調査区 S R 1002 完掘（南東から）



2 第2調査区 1面目（西から）



6 SK 1014 断面（南から）



3 S R 1001 完掘（南から）



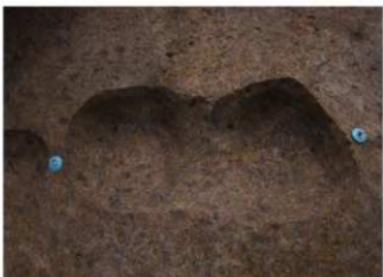
7 SK 1016 断面（北から）



4 第2調査区 S R 1002 断面（北から）



8 SK 1016 遺物出土状況



1 SK 2003 完掘（北東から）



5 SP 1017 完掘（南から）



2 第2調査区C-C'断面（西から）



6 第3調査区3面目全景（西から）



3 第3調査区1面目（西から）



7 第4調査区1面目全景（北から）



4 第3調査区包含層1断面（南から）



8 第4調査区土層（西から）



1 第4調査区 S R 1002 完掘（南東から）



5 第5調査区 D-D' 断面（東から）



2 SK 1017 遺物出土状況



3 SK 1017 完掘（北から）



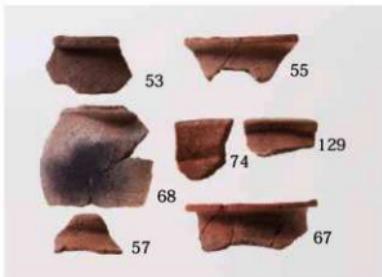
4 第5調査区 包含層 1 完掘（北から）



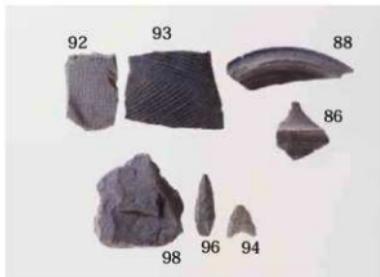
1 SK 1002 出土遺物



5 SR 1002 第4層出土遺物



2 SR 1002 弥生土器甕①



6 SR 1002 石器・須恵器



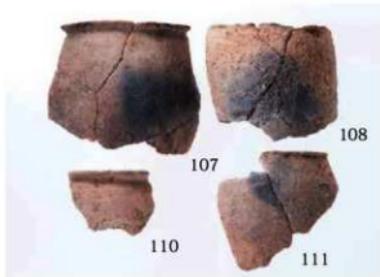
3 SR 1002 第6層出土遺物



7 SR 1002 弥生土器甕②



4 SR 1002 弥生土器



8 SK 1001 出土遺物



1 SK 1016 弥生土器 壺



2 出土遺物一括



3 焼成破裂を受けた土器片

報 告 書 抄 錄

高松市埋蔵文化財調査報告第195集

多肥宮尻遺跡

平成30年6月29日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発 行 高松市教育委員会
印 刷 有限会社 河端商会